

朝鮮統計時報

第一號



平壤牡丹臺

朝鮮統計協會

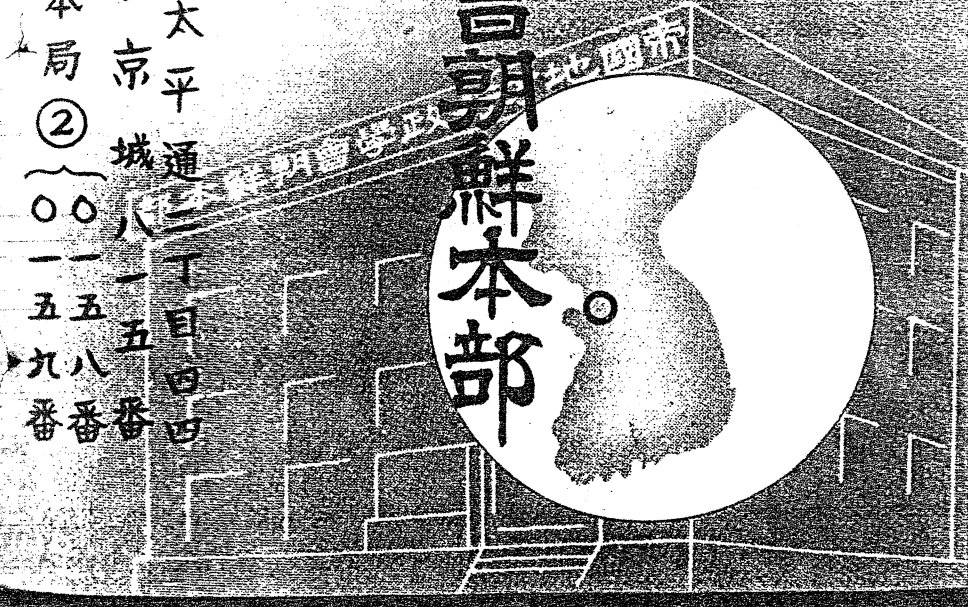
株式會社
帝國地方行政學會朝鮮本部



京城府太平通三丁目四

振替京城八番

電話本局②〇〇一五八番



日本毛布工業組合

京城配給所

最も完備されたる

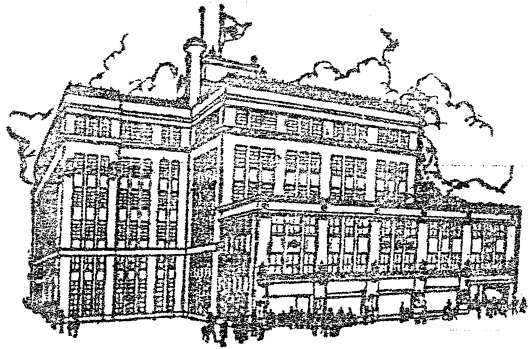
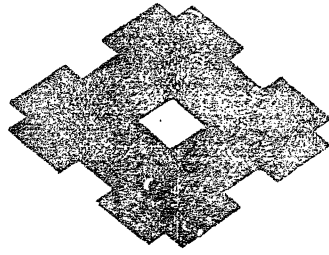
よりよき専門店

毛布机かけ旅行用膝掛
蒲團袋蚊帳カーテン

京 城 本 町 二 丁 目
 丸 三 毛 布 店
 電 話 振 本 替 局 京 長 城
 〇 三 九 〇 六 八 四 番 番



寄附 No. 62093



日々のお買物は三中井へ

三中井

城 京



許 特 産 國 良 優

器 算 計 陽 太

第一級次第詳細な
ログ連累機します

杜撰な計算表に悩されたり……複雑な計算に疲労を感じたり……急ぎを要する計算に焦燥されたり……と言った御経験はお持ちになりませぬか？
此んな場合、貴下の坐右に一臺の計算器が有りましたら、どんなに御執務が明朗であり、能率的であることせう。
輕快なる装置と、永年の使用に耐へ得る堅牢さと、實用品としての低廉なる價格とを具備する眞に理想的計算器……純國産太陽計算器あるのみです。

11右方
ス及
付ケ

No. 13	No. 14	No. 16	No. 18	No. 20
0×8×13桁	9×8×11桁	9×9×16桁	9×10×18桁	10×11×20桁
¥250.00	¥210.00	¥310.00	¥355.00	¥430.00

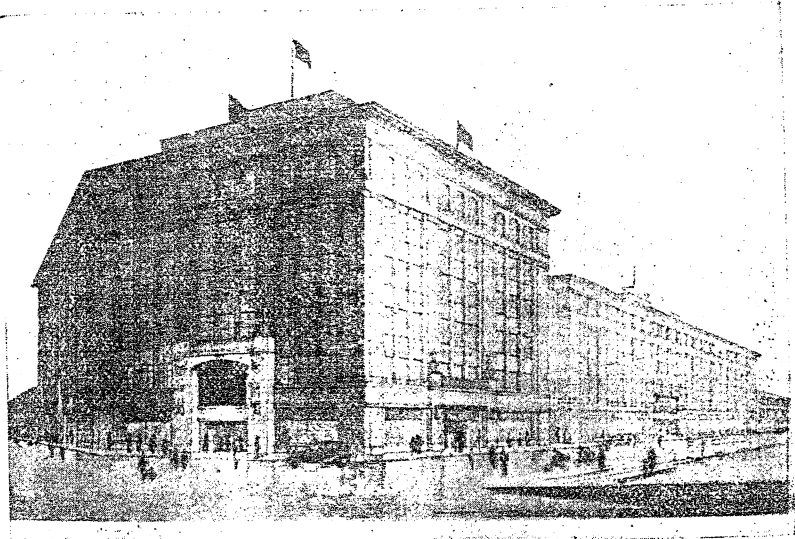
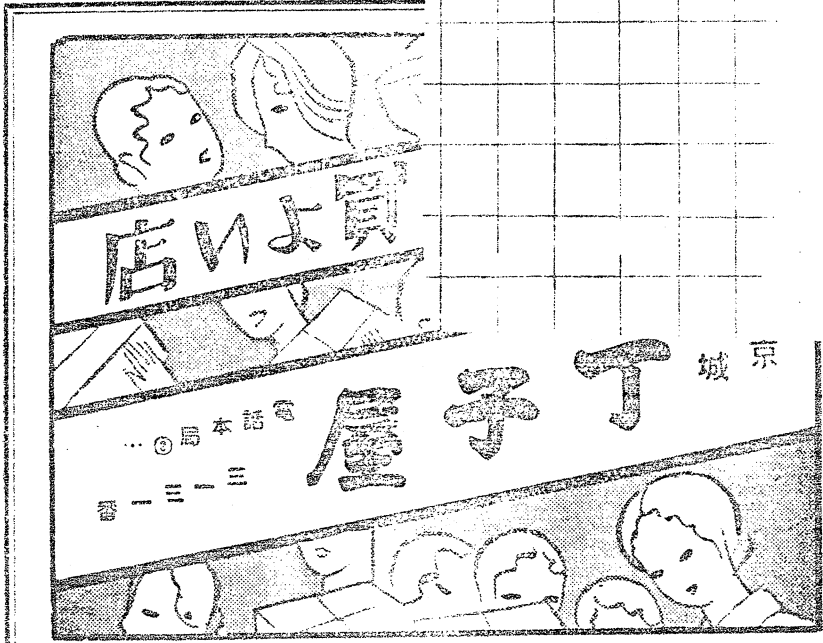
保 責
證 任



平塚出張所
平塚府壽町一三四
電話 225

朝鮮總代理店
塚 谷 計 三 郎
京城府旭町二丁目十五番地
振替口座京城四六八・私書函十八號
電話本局②1303・2003

京城陳列所
黃金町二丁目九
電話本局②5010



路鍾城京

信和の後工竣



株式會社

村

木

時

計

店

京 城

出 張

所

營業科目

金銀時計類
 蓄音器
 金銀メガネ
 寶石入ユビワ
 金及白金細工
 美術裝身具一式
 金銀什器
 賞牌紀念章類
 金銀祝盃及諸紀念品

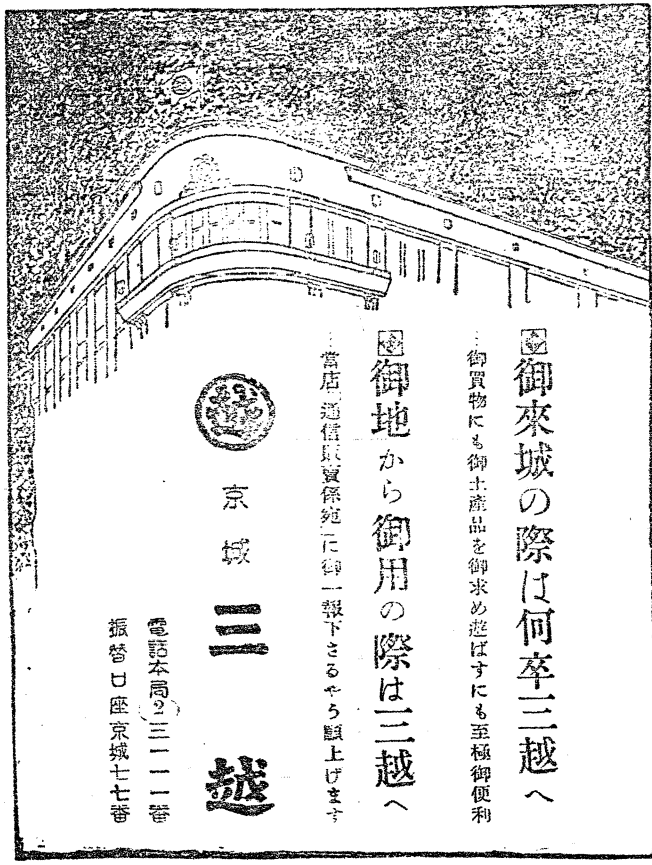
標準時計設置

店内に仁川觀測所直報の標準時計を設置致して居りますから
何時にでも最も正確なる時を御答へします

京城本町二丁目

電話本局 四四七七

振替京城 三一九〇



御來城の際は何卒三越へ

御買物にも御土産品を御求め遊ばすにも至極御便利

御地から御用の際は三越へ

當店通信販賣係宛に御一報下さるやう願ひ上げます



京 城 三 越

電話本局ヨ三一一一番
振替口座京城七七番

朝鮮統計時報 第二號 目次

能動的精神を喚起せよ

政務總監 今井正清 徳 (2)

統計の話 (一)

京城帝國大學教授 大内武次 (6)

確定人口と速報人口との關係に就いて

總督府統計官 眞鍋半八 (14)

朝鮮過剩人口の北移策

總督府密託 竹内清一 (17)

本會存立の本質的意義

大宅義一 (23)

統計叢話 (二)

村辻元 (30)

資源調査とゴム工場

原正 (36)

實務の頁

申告書の整理に就いて

臨時國勢調査課 (41)

資料

扉 卷頭小言 三

□米 (昭和十年)

資料者芳名 三

□麥 (昭和十年)

48 46

大豆、小豆、粟(昭和十年)

(50)

棉(昭和十年)

(52)

工場(昭和九年)

(54)

蕨(昭和十年)

(56)

林産額(昭和九年)

(57)

酒(昭和九酒造年度)

(58)

朝鮮國勢調査確定人口(昭和十年十月一日)

(60)

雜

筆

第一線の體驗……………池 周 甲 宙

スピード時代……………日・T 生 宙

俳句—古都のさくら……………庄 司 香 月 交

カラットの話……………山 見 生 交

詩を語る……………今泉夜詩秀 交

所 感……………盧 演 錫 七

所 感……………劉 濟 民 七

所 感……………安 瓊 煥 元

話 の 塵(2)……………大 義 生 四

内地確定人口……………二 六

低金利時代……………二 六

寄贈圖書……………元

統計メモ……………吳

統計日誌……………六

日本中部十八府縣統計關係者大會……………六

會 報 昭和十年度 朝鮮統計協會收支決算書……………七〇

協 會 人 事……………七〇

編輯後記……………七三

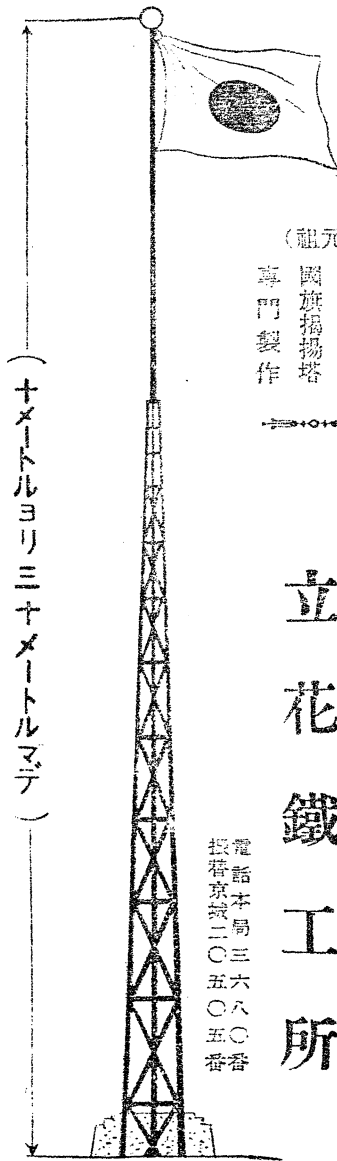
鮮明な印刷
活版石版
帳簿製本

合資
會社

行政學會印刷所

京城府南米倉町一五九番地

電話本局二八一八・三五三三番
振替京城九九七四番



(祖元)

立花式鐵骨
國旗揚揚塔
專門製作

京城府光熙町壹丁目一四五

立花鐵工所

電話本局三六八〇番
振替京城二〇五〇五番

(十メートルヨリ三十メートルマデ)

朝鮮統計時報

第二號

卷頭小言

五月の太陽は一年中で最も輝やかしい。しかも我が半島五月の朗朗さは、全く他に見ることの出来ないもので、朝鮮を訪れる人々の感嘆措かないところである。野に山に陽炎立ち、若草萌え、空はあくまで高く擴がり、やはらかな雲團氣の裡にあつて、あらゆるものが生氣躍動してゐる。

我が統計協會も亦この中にあつて極めて健やかに育ちつゝある。勿論生れて間もない、謂はば未だ幼児に過ぎないものであるから、早急に大人の歩みを望む譯には行かないけれども、育ちは誠に順調で生氣に満ちてゐる。そして大人のやうに出来上つたものでないだけに、前途にかけ得る望みは實に大きい。五年、十年と経過するうちに、我が協會が如何に充實した權威あるものになるかを思ふとき、ひそかなる喜びを禁することが出来ない。

が要するに協會の將來は、一に會員諸賢の御力を俟つて始めて開けて來るものである。本誌に掲載した政務總監閣下の御言葉にあるやうに、眞に會員諸賢が能動的精神を喚起して、絶えず積極的に働きかけ、我が協會の將來を守つて貰きたい。そして本協會の企圖する統計事務の刷新改善、統計の民衆化が層一層順調に實現するやう翼つてやまないものである。

能動的精神を喚起せよ

政務總監 今井田清徳

朝鮮の統治が、第二「四半世紀」に躍入したのを機会として、朝鮮統計協會が組織せられ、其の收め得た所の會員數六千餘名、年四回の機關誌を發行して統計思想の普及を企圖するに至つたことは歡びに堪へない所である。

一國政治の上には勿論、我が朝鮮として如何に統計の正確と豊富とを期することが必要であるかに就ては、既に創刊號誌上に諸家の意見が發表されて居る様であるから、私としては雜感の二、三を述べて會員諸君の御參考に資した

5。

x

人として人生社會に立ち、一つの仕事に従事する場合に、其の人の値打と仕事の效率とを決定するものは「能動的精神」の有無であると思ふ。即ち己れの胸中に内燃する心力による純正なる動機を動機として、我れ自ら進んで事を爲すといふ精神上的態度を有つや否やである。凡て乞食や遊食の惰民でない限り、何人と雖、國家社會機構の有機的な繋りの中に於て一局部の仕事を支擔して居ない者はなく、各自その分擔の仕事を通して、國家社會に貢獻すべき義務を負ふて居るのであるが、同じく其の義務に服して仕事を爲す場合にも、其の心の持ち方が受動的であるのと、能動的であるのととの差によつて非常に大なる軒輕が生ずるのである。

例を統計事務にとれば、これは諸家の意見中にあつた如く、極めて地味で且つやり榮えが無いといふ理由で其の勞を厭ひ、唯だ定期の報告例等があつて職務上已むを得ないから嫌々ながら之をやるといふのは受動的、消極的な態度であり、進んで統計學の書籍等を讀んで統計の重要性に關する認識と興味とを會得し、此の事務を行ふ上に於て研究工夫を凝らし、更に報告例によるものゝ外、己れ自身の創意に出づる各種の統計をも併せて製作するといふ様な態度は、能動的、積極的である。嫌々でやる仕事と、自ら好んでやる仕事との間に如何なる効果の大差が生ずるかに就ては説明を要しない所である。賃銀のための勞働と、自身の趣味性を満足させるためのスポーツ等が同じく肉體を驅使することでありながら、一は苦痛感と疲勞とを伴ひ、一は快適なる保健法となる差異に就て考へたら、ハッキリ解ることであらう。

×

公務に關する場合の能動的精神は、然らば何によつて喚起し得るか。それは唯一つの「まごころ」でなければならぬ。己れの受持つ仕事を通して、國家社會に奉ぜんと思ひつめた「まごころ」から純一なる能動的精神は發するのである。唯だ己れ一箇の名利を遂ひ、集團生活全體の利益、福祉の向上に就て關心無き人は「まごころ」なく、隨つて正しき意味の能動的精神ありとは謂へぬ。眞心無き人の爲す仕事からは倦怠生じ、禍害うまれ、その人自身の生活に破綻を來さねばやまない。

×

眞心は何人に於ても大切である。特に行政機關に携つて、國家の意志を奉じ國家の事務を行ふ者に於ては絶対に必要である。譬へば府邑面吏員諸君の場合を想像すれば、此の能動的精神の有無と強弱とは直ちに府邑面行政の上に反映

し、随つて朝鮮の政治全體の上に大なる影響を齎すこと謂ふ迄もないのである。

然らば眞心ある府邑面吏員は如何なる事を爲すか。例を統計事務にとるならば、彼は己れに分擔する調査事項が、郡、道、本省と集積して朝鮮統治上の重要方針を定むべき本質的數字となることを辨へるが故に、誰から命ぜられ鞭撻されることもなく、己れの良心の聲に聽いてまづ調査の正確を期するであらう。のみならず此の事務に關して深き興味を會得したる彼は、己れの職を奉ずる府邑面の住民、又及びしては全朝鮮民衆の健康を向上せしむべき方法を考へて、本となる所の各種の統計を、己れの創意に於て作り出す努力すら爲すであらう。

例せば、甲の部落と乙の部落とは其の農耕の條件が相似て居るに拘らず、甲の部落の負債の合計は乙の部落のそれよりも多く、一方は更生の途を辿り一方は疲憊の途を急いで居るのは如何なる原因によるかを知るために、其の兩部落民の勞働日數、家畜數、飲酒者の數、出稼者よりの送金額、金肥購入額、副業收入等々必要の關係事項を調べて、指導上の新なる指標を發見したり、或は鶏の産卵率をその鶏種や飼育法の比較によつて類推したり、或は家族中に病者を出すことがどの程度に其の家計の消長を支配するかを事實を釋ねて醫療機關社會化の問題に觸れる等々、各種各様の有意義なる統計を作り出だす事となるであらう。而して斯の種の統計が眞に民衆の生活に相直接する行政第一線の人々にのみ與へられた可能事であることを感謝する氣持にするなり得るであらうと思ふ。

×

吏員諸君の大多數は普通學校乃至中等學校修業程度の人々であつて、或はモット上級の學校に入り高度の教育を受けなければ、自分といふものが役に立たぬと自卑し一居る人も尠くなくと思ふ。然しながら諸君は學校教育と學問とを餘り混同して考へてはならぬ。學問が學校にのみあると考へることは誤りである。即ち諸君にして己れの生活内容を

深め、己れの人格、識見を高めて、國家社會に奉じたいと念ずる真心だにあらば、生きてる學問の題材も機會も諸君の周圍に充満して居る筈である。

學者、専門家などが國利民福を進めるために行ふ各種の研究は、多くは限られたる實驗材料や書類の上に於てさるゝものが多いのであるが、諸君の領野にはビチ／＼生きて動いて居る實際の社會と、限りなき實物の資料とが諸君の認識と研究とを待ちつゝ横はつて居る。よし之等を學問的な術語で理論化し、概念づける事はできなくとも、統計學の簡單なる定義を諒解して、諸種の大量現象を集計し分類して現實相の斷面を把握して行つたならば、或は學者、専門家をすら裨益する様な權威ある資料を提示することも敢て困難ではあるまいと思ふのである。

何度も繰返す様であるが、要は「まごころ」である。真心ある人は己れ自ら教育し、啓發しつゝいかなる權威ある業績をも擧げ得るものであることを牢記して修養を勵まれないと希望する。

×

ひとり府邑面の吏員諸君のみならず、本協會の雜誌を通して統計の思想が一般に擴まる場合、夫等會員諸君各自の眞心に出づる任意な研究調査が興味と實益ある「素人統計」となつて、續々本誌上に發表さるゝ事ともなるならば、本誌の存在は其の使命と價值とを自乘するものであらうと思ふ。

特に實際社會に相直接する行政第一線の諸君が自ら考案し、自ら手を下して調査した各種の統計を本誌上に於て拜見せんことを待望する者である。

統計の話 (一)

東京帝國大學教授 大内武次

此度朝鮮統計協會が設立されて、その機關誌たる朝鮮統計時報の創刊せられましたことは、朝鮮に於ける統計界の向上に資すること尠くないと信ずるのであります。誠に慶賀に耐えない次第であります。殊に自分が統計學を専攻して居ります關係上、實際統計界に於て、斯る機關誌が出来ましたことに付きましては、衷心から御喜びを申上げざるを得ないのであります。茲にこの機會を利用して、平素考へて居ることを申上げて見たいと思ひます。統計の實務に従事されて居らるゝ方々にとつて、先づ何よりも大切なことは統計が何であるかと云ふことであります。元よりそれは既に解つて居ると申されることではありませうが、その解りきつて居ることを篤くと問ひ詰めて見ますと、案外その正體がはつきりしないことがあるのであります。これは統計のみに限つたことではありません、世の中の事物で常識的に自明のものであつても、問ひ詰めて見ると正確な概念の得られないものが澤山あります。従つて、こゝで四方八方から統計と云ふものを眺めて見まして、一體その事體がどこにあるのであるかと云ふことを突き詰めて考へて見ますことは、或は必要なことではないかとも考へられるのであります。暫く紙面を拜借して、そのやうな事を述べさせて戴きたいと存じます。

統計と云ふ言葉

今日我々が意味する所の統計と云ふものは、近代に導入して始めて出来た所のものであります。昔はなかつたのであります。然し乍ら統計と云ふ言葉は以前もあつたのであります。けれどもそれは今日の統計を意味した言葉ではなかつたのであります。以前に於て統計と云ふ言葉は、總計とか、メ高とか云ふことを意味したのに過ぎなかつたのであります。それ故徳川時代の金銭に關する古證文などを見ますと、個々の金高をメめて、統計金何兩也などと示してあるのであります。そのやうに統計と云ふ言葉は、昔は今とは全く違つた意味を持つて居たのであります。而も亦今日の統計を指す言葉が別にあつたかと申しますと、それは全然なかつたのであります。元來今日の統計なるものそれ自體は、昔は存在してゐなかつたのであります。云はば昔は統計なるものゝ概念はなかつたと云つて良いのであります。統計は全く近代の産物であります。近代になつて始めて統計が成立することになつたのでありますから、こゝにその新しい概念が出来上りました。それでその新しい概念を示すために、昔は全く別の意味に用ゐられて居た統計と云ふ言葉を、そこに宛て用ゆることになりました。それでやがてそれが廣く通用することになりました。その言葉の昔の意味は失はれて、今日の統計と云ふ言葉の内容が一義的に確定されることになつたのであります。

日本で統計の出現を見ることになつたのは明治初年であります。その際にはそれを示すのに、或は政表、或は表記、或は綜合などと區々の言葉が用ゐられて居りました。又日本の統計界の先覺杉享二先生は、それを指す所の新字を作り、それをスタチステクと呼ばせやうと云ふやうなことも、企てられたことがあつたのであります。けれどもその間に、自ら統計と云ふ言葉のみが、専ら廣く行はれることになつたのであります。明治十四年には統計院と云ふ名稱を以て、日本の統計機關が設置されるに至り、又その翌年からは統計年鑑と題した統計刊行物が發刊されることになりました。茲に統計なる言葉の意義が確固不動のものとなつたのであります。

統計とは統計的調査方法によつて得られたもの

前に申しました通り統計は近代の産物であります。昔はなかつたのであります。然し乍ら社會上の事實を數字に徴して考慮すると云ふことは、全然なかつた譯ではありません。就中人民の頭數に關する調査は、いづれの國に於ても古くから行はれて居たやうであります。それは古記録に徴することが出来るのであります。最古のものとして擧げられて居るのは、バビロニアに於て西曆紀元前三千八百年頃に行はれたものであります。支那に於ては西曆紀元前三千年頃禹王の時に既に行はれて居たと申すことでもあります。日本に於きましては皇紀五百七十五年（西曆紀元前八十五年）崇神天皇の御代に既に行れてゐたと云はれて居ります。又朝鮮では高麗時代に戸口調査が行はれてゐたと申します。そして此種の人頭調査は其後に於ても亦暫々行はれてゐたのであります。それで斯ふ云ふ事を鑑みますと、人口に關しては既にこのやうに古くから統計があつたのではないかと、反問せられるかも知れませんが、それと今日の統計とは聊か趣を異にした點があるのであります。

元來統計と云ふものは、その示さるべき事實を、正確に反映する所の數字でなければなりません。そうでなければ統計たる名稱に價しない所のものであります。統計が統計たる所以は、この正確性が確保されて居るからであります。元より統計は人間が事物を數へ又は量つて得た所の數字的結果でありますから、寸毫の相違なく完全に事物を數として表現し得る所のものではありません。そのやうなことは、今日の人間の能力を以ては出來ないことでもあります。それ故これを數學的に申せば、統計とは事物に關する近似値を示した所の數字であると云ふ事になります。それでありますから、統計は事實を正確に反映する所の數字であると云ひましても、その正確と云ふのは、精密科學に於て要求するやうな絶對的正確を意味するものではありません。勿論この絶對的正確と云ふことは、精密科學に於ける計量の場合であつても、得られる所のものではないのであります。その計量された値は常に小數點以下何位迄正しいとか、正しくないと云ふ事が問題になるのであります。結局數學的に云へばこれは近似値たるに過ぎないものであります。けれども自然

科學の數量的研究に於て要求する所の精密さと、社會に關する研究に於て統計に於て要求する所の精密さとは、その程度に於て相違するのであります。その相違は計量せらるべき對象が、一方は自然現象であり、他方は社會現象であると云ふことからして、その計量の方法が全然相違せざるを得ないのであります。そこから以上の相違が自ら生じて來ることになるのであります。兎も角統計の數値に於て期待さるべき所の精密性は、自然科學に於て取扱ふ數値に於て要求せらるゝが如き程に嚴密のものではなく、それより餘程ルーズのものであることは事實であります。けれどもそのルーズの程度には一定の限界があるのであります。統計が正確であると云ふことは、その數値がある一定の限界を超えぬ程度に於て、それ以内の精密さを保つて居る場合に云はるべきことでもあります。それならばその限界は如何なる程度の點に存するのでありまじやうか。

我々が日常生活に於いて取扱ふ所の數量をよく考へて見ますと、それは飽く迄微細に精密である事を必要としないのであります。實際の生活に於て相互の比較對照を明確になし得る程度のものであれば、それで満足すべきものであります。一噸の石炭を賣買するのに、計量機の指針を眼で計つて、それが一噸であることが認められれば、それは一噸であることと云ふ事になるのであつて、日常の實際生活はそれを以て足りるのであります。即ち實際の社會生活に於ては、それだけの程度の精密さのものであれば、これで役に立つのであります。然しその程度を超えた不精密のものであつてはいけないのであつて、それでは役に立たなくなりません。さればその役に立つと云ふ事を標準にして、その限度を越えない程度に於ける精密さを保つたものであれば、實際生活上に於ては支障を來さないのであります。統計の數値に於ても亦然りであります。それでありませうから統計は數學的に云へば、ある事實に關する近似値であることは云ふ迄もありませんが、けれどもその近似する程度は、社會生活の實際に於て役立つ得る數値の限度以内に止つたものでなければならぬことになるのであります。それでこのやうな限度以内に止る所の近似値が得られました場合に、その統計は正確であると云ふのであります。

扱以上申しました通り、統計はそのやうな限度以内に於て、事實に近似した所の數値でなければなりません。所が御承知の如く社會現象は複雑を極めたものでありまして、その状態は現象を異にする毎に夫々相違して居ります。従つて夫等の現象に即してどの程度の近似値が得られるかと云ふ事は、現象の如何によつて違つて來ざるを得ないのであります。ある現象に付ては、可成り事實に密接した近似値が求め得るけれども、ある現象に付てはもつと事實とかけ離れた程度に於ける近似値しか求められないと云ふ場合があるのであります。これは元より、夫々の現象の複雑した状態が相違して居ります事から致しまして、これを計量する方法に種々の相違を來すことになるのでありまして、その結果そう云ふ事になるのであります。今日金融統計のある種のものに付きましては、一錢一厘も苟もしない所の、又貸と借とが完全に合致して居ります所の、銀行の會計帳簿の結果の數字が示されて居るのでありますから、それは可なり正確のものであると云ひ得るでありませう。それに反して産業に關する生産統計になつて参りますと、それは概數を推測すると云ふこと以上の正確さを持つたものは甚だ尠ないのであります。このやうな次第でありますから、社會に關する統計にありましては、その統計が示す所の事實の性質によりまして、その數値の近似性は夫々程度を異にして居るのであります。それでありませうから、どの統計に付ても一樣に同じく、同一の程度に於て事實に近似した値を示すものではありません。如何なる事實に關する統計であるかと云ふことによつて、夫々近似の程度は相違して居ります。然し乍ら統計といたしましては、出來得る限り事實に近似した所の値を求めて行かなければなりません。人口の統計であれ、貿易の統計であれ、生産の統計であれ、その孰れにあつても、それ等の事象に付て許し得る限りの方法を用ひて、出來る丈け事實に密接してそれを反映する所の數値を求めて行かなければなりません。斯る努力が拂はれない限りは、統計の正確性は確保せられないのであります。

然らばそのやうな努力はどうしたならば實現されるでありませうか。それは即ち統計的調査方法の嚴密を期すと云ふことであります。統計的調査方法は近代に於て發達した所のものであります。それは統計と云ふ觀念と相伴つて發達

した所のものでありまして、統計なる觀念がなかつた當時に於ては、勿論統計的調査方法なるものもありません。けれども又、統計的調査方法なるものが無くしては、統計と云ふものは出来て来ないのであります。それは統計が統計であり得るのは、統計的調査方法によつて得られた数字であるからであります。統計なるものと、統計的調査方法とは決して離して考へることは出来ません。統計があれば統計的調査方法があり、又統計的調査方法があれば、統計があるのであります。即ち統計と云ふものは、その數値の事實に對する近似性を、ある範圍内に確保する所の、統計的調査方法によつて得られた所の数字でなければならぬのであります。統計的調査方法によらない所の数字は、それが確保されて居ないのでありますから、それは事實を反映する所のものであると云ふ保證がないのでありますから、統計と云ふ事は出来ないのであります。元より統計的調査方法は次第に發達しまして、昔から見れば段々嚴密なものになつて来て居ります。それでありまして、今日以前の調査方法のあるものにあつては、今日程嚴密でなかつたものもあるのであります。従つて同じく統計的調査方法によつた所の数字であつても、その方法が嚴密でないものであつたならば、その数字の正確性は餘程劣ることになりまじやう。けれども苟も統計的調査方法なるものが、存する以上は、數を得る際生ずることあるべき誤謬過失に對する何等かの用意はあるのであります。ある程度以内に於て事實に對する近似性は確保されるのであります。かゝる考慮が拂はれて、得られた数字であつて始めて統計たり得るのであります。今日法律は議會の協賛を経たものでなければならぬのであります。そうでなければそれは單なる法規命令たるに過ぎないのであります。法律たる威力は持ち得ないのであります。丁度それと同じやうに、社會事實に關する數字であつても、統計的調査方法によつて得られたものでない以上は、それは單なる數字たるに過ぎないのであります。統計たる資格を持ち得ないのであります。ある數字が統計たるがためには、統計的調査方法によつて保證された所の數字でなければなりません。この事は何が統計であるかと云ふ事を定めるに付て、甚だ重要な點であります。先づ古代に於ける人頭調査のことを申し上げましたが、それによつて得られた所の数字は、統計ではないのであります。

れは何等統計的調査方法又はそれに類似する所の方法によつて得られた所のものではないのであります。従つて如何なる範圍に於ても、その事實に對する近似性は確保されては居りません。統計は全く近代になつて存在を見ることになつたのであります、昔はなかつたのであります。

たゞ茲で一言御注意申上げておかなければなりません。それは古代の人頭調の如きによつて得られた數字は、今申す如く、統計であると云ふ事は出來ないのであります、兎も角一定の數字的結果が得られて居るのであります。従つてそのやうなものから致しまして、當時の人口狀態を推定する基本資料と見る事は出來ます。けれどもそれは飽く迄、推定の資料たるに止まるのであることに留意しなければなりません。通俗には味噌も糞も一所にして何でも數字的の資料であれば、それは統計であるかのやうに云ふ事でありませんが、これは非常な誤であります。そのことは以上申し述べましたことによつて既に御解りのことと思ひますが、尙ほ繰り返して一言申し加へておきましょう。今日の統計は一定の使命があるのであります。それは統計にとらるべき事實を數字として正確に反映しなければならぬと云ふ事であつて、極めて重大な使命であります。この使命を全ふる爲めには、どうしても統計的調査方法が必要なのであります。方法なくして得られた所の數字であつては、その使命は達せられないのであります。統計と云ふ以上は當然そのやうな使命を持つて居る所のものでなければならぬのであります。ある程度無條件にその點は信頼し得るものでなければなりません。それでありますから、統計は「社會を寫す鏡」であるとも云はれて居ります。それが鏡である所以は、信頼し得るものであるからであります、その信頼を保證し得られないものであつては統計ではありません。今日統計の實務に従事せらるゝ方々にあつては、この統計の本義をよく了解せられて、そのやうな意識を寸時も頭から離すことないやう、切に希望せざるを得ないのであります。

地階

公衆食堂

(無料サービス)

階上

大小宴会場

結婚式場

結婚披露宴会場

(サービス料一割頂戴いたします)

三階

大宴会場

正食 五百名様まで

立食 千名様まで

茶話會、座談會等には特に

御便宜お計りいたします

和洋御料理

京城府民館食堂

電話本局四六四九番

總督府食堂

電話光化門八八八番
同五六〇番ノ一九四番

朝鮮神宮南山亭

電話本局二八六三番

京城帝國大學食堂

電話光化門一六九一番
同三〇〇番ノ一三七番

經營者 山田眞一

京城帝大醫院構内

昭五食堂

電話光化門二一一五番
同三〇〇番ノ八〇番

京城俱樂部

電話本局 二〇三番
一六五〇番

一

統

般

裝

飾

と

計

圖

表

製

作

裝

飾

部

意

匠

部

電話本局

②

三六六二番
三八〇一番

七二町成御府城京

舟

霞

濱

鹽

番三八〇二一城京替振

確定人口と速報人口との關係に就て

總督府統計官 眞鍋半八

1935

朝鮮昭和十年國勢調査の結果は客年十一月二十一日附新聞紙上に同二十六日附官報に夫々道別世帯及人口概數を公表し、更に同年十二月二十五日附府邑面別世帯及人口概數を朝鮮昭和十年國勢調査速報として印刷發行したのであるが、今回國勢調査の基本材料である申告書より直接集計した所謂確定した朝鮮の總人口を發表するに當り速報人口と確定人口との因果關係に就て一言之が説明を加へて地方廳に於ける本事務擔任者の御參考に供したいと思ふ。

凡そ各般の統計調査は可及的迅速に且つ正確に其の發表を爲されてこそ之が利用價値は大なるものと謂へるのである。殊に國勢調査の如く人口の常に變化しつゝあるものゝ調査に於て一層之が感を深くする處である。故に内地は勿論朝鮮に於ても調査施行後最も迅速に人口の發表を爲す方

法として各道より提出された道、府、郡、島要計表（照査表を基準として道、府、郡、島に於て集計作成されたもの）に基きとりあへず之が計數を發表することゝしたのである、これが速報人口（人口概數）と稱するものである。又別に國勢調査の基本材料である申告書に基き嚴密な照合検査を實施し些少の疑義事項に到る迄之を直接府、邑、面に照會し、訂正を加へ、正確に整理された申告書より確定した人口を發表する、これが確定人口と稱するのである。尙換言すれば速報人口は各府、郡、島に於て集計された、府郡島要計表より之をとり、確定人口は調査の基本材料である申告書より直接總督府に於て之を集計したものである。茲に於て考慮せねばならぬことは、若し各道に於て集計された要計表の計數が完全なものであるならば、前の述

確定人口と速報人口とは全く相等的な結果を得られなければならないのである。然しながら前記調査の結果に徴しても、確定人口と速報人口とは完全に一致を見ないのである。之は勿論國勢調査員並に各道本事務擔任者の熱意を缺くと言ふ譯ではないが、整理事務上の孰れかに僅少な缺陷

て、速報人口より確定人口の増加した道は平安南道を筆頭に全羅北道、忠清北道、平安北道、忠清南道、全羅南道、江原道、咸鏡北道及京畿道の九道で、減少した道は慶尙南道、黄海道、慶尙北道及咸鏡南道の四道である。而して其の増加總數は四四八人であつて減少總數は一〇五人である

のあつた爲如斯齟齬を生ずる結果となつたのである。要するに確定人口と速報人口とは同性質のものではあるが、速報人口に於ける不確實な計數を確定人口に依り正確不動のものとして爲すに在るのである。

道名	確定人口		速報人口		速報人口と確定人口の増減(△)
	男	女	男	女	
京畿道	二,四五一,六九二	一,二六七,八八八	二,四五一,六九二	一,二六七,八八八	〇
忠清北道	九九,四〇〇	四九,二二七	九九,四〇〇	四九,二二七	〇
忠清南道	一,三三六,八三五	七〇二,六四〇	一,三三六,八三五	七〇二,六四〇	〇
全羅北道	一,〇七三,三三六	五三三,九二二	一,〇七三,三三六	五三三,九二二	〇
全羅南道	二,五八〇,三三三	一,二五三,一八八	二,五八〇,三三三	一,二五三,一八八	〇
慶尙北道	二,五三三,三三三	一,二六六,三三三	二,五三三,三三三	一,二六六,三三三	〇
慶尙南道	二,四八八,三三三	一,二二八,七六七	二,四八八,三三三	一,二二八,七六七	〇
黄海道	一,四七三,三三三	七三六,六六六	一,四七三,三三三	七三六,六六六	〇
平安南道	一,四九〇,三三三	七四五,三三三	一,四九〇,三三三	七四五,三三三	〇
平安北道	一,七〇〇,三三三	八五〇,三三三	一,七〇〇,三三三	八五〇,三三三	〇
江原道	一,〇〇五,三三三	五〇二,六六六	一,〇〇五,三三三	五〇二,六六六	〇
咸鏡南道	一,七二〇,三三三	八六〇,三三三	一,七二〇,三三三	八六〇,三三三	〇
咸鏡北道	八五三,八三三	四二六,九一六	八五三,八三三	四二六,九一六	〇
備考	三,八九三,〇三三	二,〇三三,六六六	三,八九三,〇三三	二,〇三三,六六六	〇

朝鮮過剩人口の北移策

總督府囑託 竹 内 清 一

我國の人口が急激に増加しつゝあることは周知の事實であり、之を如何に消化するやの問題は現下の重大なる關心事であるが、朝鮮は此の圏外に在るやの推斷を下すことは極めて謬見である。

今朝鮮に於ける人口増加の推移を観察するに昭和八年末現在人口は約二千八十萬人であつて、之を併合當時に比較すれば二十三箇年間に實に七百五十萬人餘即ち年々約三十三萬人の増加を來して居り、此の相對的增加率一五人一七は内地の一四人一二に比し一人〇五の高率を示してゐることとは特に注目すべき點である。従つて其の密度は年々濃厚の度を加へ昭和八年末に於ては内地の東北區と略々匹敵し一方軒に付九四人二を示すに至つた。尤も全内地の平均密度一七五人九に比較すれば相當の懸隔があり一見甚だ稀疎

なるが如く思はれるけれども、土地の狀況には自ら居住の適否があつて一概に論斷し得ないが若し兩者の耕地面積を標準として其の肥瘦關係並に氣候等を考慮に容れるならば耕地面積は僅かに全土の二割に過ぎず、然も多年に互る掠奪農業の結果地味比較的劣悪なるのみならず、其の中部以北に於ては今日尙二毛作の一般的に施行せられざる朝鮮に在つては寧ろ人口は相當稠密なりと謂はねばならぬ。殊に朝鮮地方は一帶に人口稠密であり内地の平均密度に略々匹敵する忠南・全南北・慶南の四道の如きは事實上人口過剩に懊惱し居ることを立證し得られるのであつて、之を地域別に對比すれば朝鮮地方の約二倍、北鮮地方の約四倍に相當して居る。轉じて農家一戸當耕地面積を見るに人口の増加に隨ひ遞減の傾向を示して居る。即ち大正十三年には一

町六三であつたものが十年後の昭和八年に於ては一町五三に低下し、就中南鮮各道の如きことを考へれば、朝鮮地方の土地兼併の結果所謂小作農に墮する者漸増し農家總戸數の約半數若くは半數餘は耕作面積五反歩未満の細農及耕作地を全然所有せぬ被傭者階級に屬するものであることは確かに朝鮮の特異現象であらう。昭和十年二月の調査に依れば全南北・慶南北四道に於ける是等細農の戸數は六二六、六〇〇戸を超へ全鮮の細農總戸數一、〇三三、四六六戸の六割強を占め平南北・咸南北四道の夫に比較し約八倍に當つて居る。加ふるに多年に亙る掠奪農業の結果一層地力の減耗を來し反當米收量の如きも内地の二石餘に對し未だ平均一石強に過ぎぬ。副業方面に於ても纏つた収入あるものは少なく從來の如き營農を以てしては到底農家の生計を償ふに至らないことは、昭和八年南鮮五道(除全南)に於て更生計畫を樹立したる二二、(二五八三)農家(食糧不足農家一三、九〇)三戸(總戸數の六割)、負債農家一九、二九四戸(同上八割四分)、現金收支不均衡農家一四、八六二戸(同上六割四分)なるに徴するも其の消息の一端を窺ふことが出来る。之れ即ち總督府に於て目下農村振興に全馬力を傾注しつゝ

ある所以である。さなきだに南鮮地方に在りては連年旱水災禍の頻發せしかを窺ふことが出来る。殊に昭和九年夏期の大水害に於ては農作物の被害のみにも南鮮六道を合せて約一千八百萬圓に達し、之が罹災民の救済更生に一年有餘の努力を拂ひ漸次農家生活の緩和を招來しつゝあるが、而も辛うじて糊口を凌ぎつゝある窮民數は慶北の一五一、六〇〇人を最多とし最少の忠北と雖、三八、〇〇〇人を下らず、全鮮窮民總數の約五割四分は南鮮六道に於て占むるの實情である。南鮮地方の狀況斯の如きにあるので最近該地方の窮農にして内地に渡航する者年を逐ふて増加し、昭和九年末の内地在住朝鮮人數五三七、五七六人中九割三分は言餘を占むる所である。而も其の邊の數は勞働者であつて東京に於ける最近の調査に依ると月收三十圓未満の者大多數を占め、甚しいのは月收十五圓以下で八人以上の家族を支ふる者四十三戸を數ふるの實情に至つては其の生活の悲慘は寔に推測に餘るものがある。

畿内内地産業界は幾分好轉を見たけれども未だ經濟市場は活氣を呈せず、勞働の需要大ならざるに加へて言語・風俗・習慣の相違、文化程度の懸隔等より就職上種々の障害を來す結果、此等在内地朝鮮人勞働者中失業する者相當に多く昭和八年末に於ては在留勞働者數の約二割七分の六〇、一三五人に達し之を局地的に見れば極めて失業率の深刻な所がある。殊に滋賀・京都・和歌山・大阪・愛知等の各府縣に在つては失業應急事業に於ける勞働手帳受有者中朝鮮人勞働者數が五割二分乃至七割なるに觀れば今や内地に於ける失業問題は宛然朝鮮人問題なりと稱せらるゝのは尤なことである。此等失業者の生活狀態の悲惨なことは想像の外であつて公私の救助に依り、或は殘飯拾ひ、物貰ひ等をして僅かに露命を繋いで居る有様であるから家賃等の支拂は固より不可能であり頻々として借地・借家に關する紛争を惹起して居るのみでなく、窮餘の結果は容易に窃盜・詐欺・金錢強要等を敢てし延ては内鮮融和を阻害するに至る實情であつて、此の上内地渡航者の増加を見んか益憂慮すべき情勢を展開して忌むべき事態を惹起するの惧なしとは斷言出来ない。従つて今後特に南鮮勞働者の内地渡航に相當の制限を加へて消極的に在内地朝鮮人勞働者の

生活緩和を圖ると共に、一面他地方に進出の途を拓きて益鮮内産業の振興を策し増加人口の消化に努むることが最も適切緊要の問題でなければならぬ。

幸ひ鴨・豆兩江の上流廣袤二千方里に互る地帯は人煙稀薄にて三十餘萬町歩の農耕適地が有り、既住の火田民三萬餘戸を整理定著せしめても尙優に四萬戸、三十萬人を收容し得られるのみでなく該地域内には相當の工業原料を生産し得る見込があり、特に無盡藏の木材を原料とする製紙工業の外亞麻・甜菜・製粉・酒精等農業加工品の勃興を見る曉には多くの工場設營に伴ひ一段と人口の増容を許すの餘地大なるものがある。従つて南鮮地方に溢るゝ人口を移して此の地方に定住せしむるならば克く天與の寶庫開發を促進し得らるゝと同時に人口分布の緩和調節となり、延ては内地渡航者數の減少ともなり當に朝鮮自體の爲のみでなく又以て内地の失業問題の解決に資する所以である。

然し乍ら由來南鮮地方の農民は西北鮮の事情に疎く且、水田作に終始し來つた關係上遠かに氣候風土を異にし畑作を主とする高地帯に之を移住せしむることは動もすれば其の安定を期し得ない虞がないから、先づ西北鮮地方の諸工事に勞働者として赴役せしめて勞銀に依り生活の

資を得せしむると同時に其の間自ら此の地方の農耕の有望

なることを認識せしめて、將來農業移民として容易に北移定住し得るの素地を養はしめることを必要とするのである。然るに偶々西北鮮地方の開発其の緒に就くに從ひ羅津満鐵工事、長津江水電工事、滿浦線鐵道工事等を始めとして隨所に大規模の諸工事勃興し、何れも多數勞力の不足を告げ南鮮農村より之を需むる外なき趨勢に在つたのみでなく、滿洲國に於ても朝鮮と接壤の地に圖寧線鐵道工事の起工を見頃に勞働者の需要を増加するに至つたので、茲に總督府は前述の趣旨に基き昭和九年春より南鮮過剩農民の大量的北移策を採り勞々勞力の需給調節を企圖するに至つた次第である。先づ南鮮農民をして安んじてこれ等諸工事に赴役し得しむる爲各工事當業者の間にも充分の協力を求めると同時に雇傭條件の協定を遂げ最低賃金の設定、中間搾收の撤廢、疾病、傷害の保障、歸郷旅費の支給等を骨子とする覺書を交換し、輸送旅費は雇傭主の負擔とするも總督府は特に、三等汽車船賃五割引の便宜を供與すると共に、一面雇傭者をして可及的家族持勞働者の使役を容易にする爲家族の旅費は全額之を總督府の負擔とし尙勞働者の募集、證衝、輸送等に付ては總督府に於て一切の勞を執るに

至つたのである。

斯て同年四月事業を開始し約二個月半の間に南鮮窮農二、五〇〇名を關係道と協力の下に轉住せしめたのであるが當初勞働者の此の種作業に對する不馴と無自覺等に因り、或は雇傭者の所謂配下にして雇傭條件の内容を充分會得してない者があつた爲彼此感情の阻隔を來し往々紛議を醸したこともあり、又就勞を嫌忌して中途他に逃走離散した者が無いでもないが大部分の勞働者は克く忍苦就勞し更生の實を擧げた者が尠くない。就中羅津大倉組へ斡旋した一團の如きは勤儉克く數千圓の貯蓄を爲し、或は南鮮地方及關西地方風水害に際し若干金を割いて罹災民救済の資として出捐する等頗る感心すべきものがあつて羅津業界に於ては斯る優秀なる朝鮮人勞働者は嘗て見ざる所なりと激賞し、北鮮滿鐵土建協會主催の下に盛大なる表彰式を舉行せられたことは當時の新聞紙上に報道を見た所である。又滿洲の圖寧線工事に就勞した勞働者が東滿地方一帶の農耕に好適なるを看取し工事終了後に於ても四〇餘戸は彼の地に越冬し、昨春より東京城郊外の渤海農場に小作農として入り込み或は更に北進して東滿の奥地の開發に従事しつゝあることは愉快に堪へない。尙離散逃走した者と雖多くは歸

郷せず、北向して間島に入り農耕に従事する者もあり、或は北鮮各地の炭礦等に職を求め越冬し昨春より更に其の附近の諸工事に従事して居り大體に定住の傾向を示して居る。

一昨夏南鮮一帯を襲つた未曾有の大風水害は一瞬にして一眸千里の美田を荒野と化し、罹災民の窮狀は正視に堪へないものがあつたことは世人の記憶に新なる所であるが、一昨初冬之が救済策の一として被害激甚なる者三、六〇〇餘名を西北鮮の炭礦へ移動せしめたのである。炭礦に於ては天候の如何に拘らず稼働し得る特長があり、罹災民の轉住先として最合適なるを認め輸送費全額總督府負擔の下に之を實施したのであるが、南鮮農民の大部は全く炭礦の認識を缺き徒らに坑内作業を危険視する向もあり、又雇傭者側に於ても宿舎の増設間に合はず急進の粗末なる設備もある等の關係から相當紛議を惹起し歸郷又は離散した者尠くなかつたが、北鮮各炭礦へ轉住した者は大部分定着して今尙勤績稼働し生活の安定を得た者相當あり、中には事務員に擢用せられ或は監督者の地位に昇格せし者等あつて大體に於て所期の成績を収め得たものと信ずる。更に昨年に入

りては解氷期以來滿浦線工事、古茂山小野田セメント會社工事、羅津滿鐵工事並に同邑都市計畫工事等に對し三、二〇〇餘名を斡旋移動せしめたが、幸ひ雇傭者の理解と勞働者の自覺の向上とに依り各所とも一昨年に比し移動少なく稼働成績良好である許でなく、勞資間の協調も亦極めて圓滿にして殆んど紛争を見ず頗る好評を博したのである。

由來朝鮮人勞働者は(一)仕事に熱心を缺き責任觀が薄い(二)移動性に富み定着性に乏しい(三)貯蓄心がなく休業率が高い等の短所を數へられ、土木工事の如き急施の作業には全然不向の勞働者として兎角非難の聲を聞き特殊作業以外には概して歡迎せられない憾もあるも、昨年三月以降十月迄の間總督府に於て取扱つた勞働者三、二〇〇餘名中離散者僅かに二割に足らぬ好成绩である。就業歩合の如きも高率を示し各紹介先に於ける稼働人員は日々九〇%を下らず、就中羅津大倉組に在つては常に九五%以上の就業歩合を持續し多額の郷里送金と五千餘圓の共同貯蓄を爲し毫も滿・支人苦力に劣らぬ好成绩を収めた次第であつて、今後本事業を繼續實施し勞働者の素質向上に一段の訓練を加へるに於ては朝鮮人勞働者の前途は大いに刮目すべきものが

ある。昨年は北鮮地方に於ける工事の出揃稍遅れた爲八月以降に至り速かに労働者の需要を増し各當業者間に相當激烈な争奪が演ぜられ、總督府幹旋の労働者の如きも多少其の禍を蒙るに至つたが時恰も南鮮地方の農繁期に際會したのと、大演習に依る鐵道輸送力の關係等に依り豫期の移動を實施し得なかつたのは甚だ遺憾であつたが本年に入つては、西北鮮地方の事業界は一層の活氣を呈し滿浦線に約二萬、北鮮一帯に約二萬の労働者を必要とする見込であるから更に本事業に一段の努力を拂はんとするもつである。

以上南鮮運搬人口の北移策に就き其の趣旨及實績の概要を述べた所であるが要するに本事業は(一)南鮮窮民の救済(二)勞力の需給調節(三)富庫の開発促進(四)人口分布の緩和調節(五)内地渡航労働者の減少等の五大目的に基いて實施せらるゝに至つたもので、實施二箇年の間に約九千三百名を移動し中に多少の歸郷者を見たのは已むを得ない所であるが其の大部分は彼地に滞まり當初の事業に引續き従事し或は他に適職を求めて定住する等何れも在郷當時の窮境を脱して生活の安易を得てゐることは曩に記述した所である。一面本事業が鮮内に於ける勞力の不均衡を按配

して西北鮮地方の工事の進捗に寄與し延て富源の開発促進に資しつゝある所亦頗る甚大であつて該地方の諸工事が所期の進捗を見て居るのに全く本事業に負ふ所鮮少ならずと言ふも過言でない。又其の間労働者の訓練と素質の向上に資しつゝあることも見逃し得ない點である。唯本事業に依る内地渡航者の減少に就ては未だ之を充分に表示し得る程度に至らないが、本事業開始以來一般朝鮮人の北向思想を助長し特に南鮮農民中、西北鮮に關心を持つに至つた者の漸増したのは争ふことの出来ない事實であつて近時自ら求めて該地方に轉住する者は少くない。又昨年一月より十一月の間に出稼せる者は約一萬の多きに達し歸郷者は僅かに三二%に過ぎぬ状態なるに鑑みるも、内地渡航者の減少に相當貢獻しつゝあることは明白なりと云ふことが出来る。現に昨年中朝鮮より内地に移住したる労働者の數が前年に比し著しく減少したる理由の一は此の點に在り、今後數年間之を繼續實施する曉に於ては更に西北鮮への轉住を助長して人口分布の緩和調節並に内地渡航者の漸減を期するに至るべきことを確信して疑はぬ次第である。

本會存立の本質的意義

半島統計界の現狀に鑑み
有力官民の協力を期待す

大宅義一

官廳の立場を離れた独自の存立

世間では本會を指して單なる官廳の一施設と見る向が少くない。併し乍ら本會を本質的に觀察する時は、官廳の立場を離れ全く独自の存立を爲すものであり、又独自の立場にあつて始めて本會の眞使命は達成せらるゝものであると見る。もとより官廳の周到なる誘掖勸長を必要とするは仕の何れの團體とも同様の事情にあるけれども、さりとて世間から官廳の一分課、各役所の一出店と見られてゐるとしたら、到底その眞使命は遂行せらるゝものではなく、存立

の理由も頗る薄弱なものとなる。

卑近な例を擧げて云へば、農業の發達の爲に農會が設立されてゐる如く、統計の進歩の爲に本會を必要とする云ひたいのである。農會が農家福利の増進を目指して或は米穀統制に、或は肥料配給に、軌近顯著なる活動を爲しつゝあるのは周知の事實であるが、若し農會が單なる官廳の一施設に過ぎずとし、農業者の代辯者たる独自の地位にある事を忘れてゐたとしたら、その活動は萎靡として見るべきものなく、その存立の意義は著しく減殺されるものと思はれる。勿論法令に依り設置されたる農會の如き有力團體

と、漸く嗚々の聲を擧げたばかりの場合團體に過ぎない本會と、彼此對照すべき限りではないかも知れぬが、少くとも何れも官廳の立場を離れ各獨自の地位に立脚してゐる所にその本質的存立の意義がある點に於ては、何等の差違もない筈である。

斯の如く本會が官廳の一施設であるかの如く誤認され易いのは、現在の所、本會が事實上主として官公署統計關係者を會員としてゐる點から來るのであらうし、且つ是等會員の零細なる會費釀出と、名譽職の役職員の奉仕とに依り會を維持し運用しつゝある現狀に於ては、その活動は未だあきたらざるものがあるのは已むを得ない。本會が積極的に民衆に働きかけて本會使命の大眼目たる統計思想の普及、統計の民衆化を遺憾なく遂行せんとするには更に強力な、而して眞に官民一丸の團體たることが最も必要である。それには先づ第一に一般社會に本會の存在を認識せしむるが急務であり、更に進んでは本會の活動に協力支援せしむるの機運を招來せしめねばならぬと思ふ。幸ひにして本會設立以來贊助の意を表し激勵を興へられた向も少くなく甚だ心強い次第である。しかし筆者の私見としては、更に之等の理解ある有力者の支援を基調として一般の輿論を喚起し、

將來は内地に於けるが如く地方公共團體の補助金又は負擔金を維持の基本とし本會が充分の活動を爲し得る時の來ることを期待してゐるのである。

閑却され勝ちな統計事務

茲に於て見様に依つては聊か暴露的でもあり、と云つて餘りに抽象的であるかも知れないが、朝鮮に於ける統計事務の現實について筆者の見聞する所を二、三記述して見たいと思ふ。

凡そ國家事務は無制限に多量であるが官廳の活動には經費豫算の關係上自ら限界がある。そこで統計の如き極めて重要性を帯ぶる事務も他の各部門に於て次から次へと計畫施行せらるゝ謂はゆる生きた仕事の陰にかくれて、幾分輕視され勝ちの立場におかれてゐるやうである。現に總督府には臨時國勢調査課はあつても統計課はなく、一般統計事務の爲には縦に文書課内に統計係を置かれてあるに過ぎない。又各道府郡島には統計主任を置いても概ね戸口統計の調査集計に當る外は、各種報告期限の督促の任にあるが關の山で、屢々問題視される産業統計などの内容に互つて突込んだ研究も調査も爲し得ない實情にある。斯る現狀を打開

たとへ一錢たりとも徹底的に追及されるのであるが、統計に關する限り御座なりに比較的軽く取扱はれる傾きがある。爲に幾度檢閲し指示するも實効なく、しかも最近一般事務の複雑化は動もすると却て統計事務成績の低下を伴はんとする虞すら見受けられるのである。

斯る情勢は必ずしも朝鮮のみに限らず、内地に於ても同様の悩みであつたので、主要各府縣に於ては夙に統計協會の設立を見、新興滿洲國に於ても朝鮮より一足お先に鄭國務總理を總裁とする有力な協會の出現を見てゐるので、之等協會の活動に依て統計事務は今や劃期的に刷新され、統計の民衆的利用は急速に普及されつゝあるのである。而して朝鮮に於ても遅滞ながら本會が結成さるに至つたのであるが、もとより朝鮮統計協會と名乗りを掲げたとしてはあまりにも小規模の感があるけれども、本會存立の本質的意義が漸次一般に認識されるに伴ひ、漸次内容を擴充して本格的活動に入るものと期待してゐるのである。かくて本會の存在は第二の四半世紀に於ける半島文化の向上に一段の拍車をかけるものと見るのである。

低金利時代

朝鮮銀行 では日本銀行の公定歩合引下に順應して貸出金利を各一厘方引下げ四月十一日より左の通り實施した。

商業手形割引日歩一錢二厘以上 國債擔保の貸付及手形割引

日歩一錢三厘以上 國債以外擔保の貸付及手形割引

日歩一錢六厘以上 因みに鮮銀の標準金利制定は

明治十二年十二月の商業手形割引歩合二錢五厘を最初とし今回で三十三回目の改訂であるが、昭和に入つてからの變遷は左の通りで今同一錢二厘は同行創設以來の最低記録である。

商業	國債	國債以外
手形擔保	外擔保	越
二年三月	元 〇 〇	三 〇
同 十月	六 五	三 〇
五年十月	七 六	三 〇
六年十月	元 〇	三 〇
同十一月	〇 三	三 〇
七年三月	元 〇	三 〇
同 六月	七 六	元 三

京城組合銀行 でも甲種乙種共に定期預金は四厘、其の他の預金は一厘宛夫々預金利率を引下げ四月二十日より左の通り實施した。

甲種銀行 乙種銀行
定期預金 年四分六厘 四分一厘
當座預金 日歩二厘 三厘
特別當座 同 六厘 七厘
通知預金 同 七厘 八厘
別段預金 同 七厘 八厘

金融組合聯合會も低金利の趨勢に鑑み四月二十日より全鮮金組の定期預金利率引下を實施した。

組合員 年四分一厘(四厘下)
非組合員 同四分以下(同)
同時に各道區々であつた貯蓄預金當座預金の利率を鮮内最低組合を標準として左の如く引下げ全鮮的金利率低下を斷行した。

貯蓄 複利半ヶ月利 (二錢三)
預金 單利日歩 (一厘下)
八厘以下 (一厘下)
當座預金 日歩三厘以下 (一厘下)

七年九月	五 六	七 〇
八年七月	三 〇	二 五
十年四月	三 〇	二 七

朝鮮總督府財務局司計課編纂

朝鮮會計例規追錄 第二號

定價 未定

從來弊店へ發賣許可相成候右會計例規追錄は昭和八年三月第一號を發行し今般第二號を發行すべく目下調製中にて六月上旬には配本の見込に付此の際至急御申込願度此段奉懇願候

昭和十一年五月

京城府本町四丁目

營業各種印刷
和洋式諸帳簿
活字鑄造販賣



合資會社

谷岡商店印刷部

電話本局三三四〇番
一八二〇番
振替口座京城一六六二番

現代謄寫機界の最高峰!!

能率の増進…超努級號の賞讃あり
印刷の鮮明…遺憾無し
使用の簡易…極めて快適
眞價は品に、不便の

十臺よりも便利な一臺

特長

- 一、上梓の前後左右斜、移動自在にして印刷位置を正確任意になし得
- 一、原紙補助絹を有し原紙の破損なし
- 一、絹は取り外し自在にして色刷印刷にも適す
- 一、印刷紙の一齊締付装置により紙押へ極めて簡易
- 一、臺盤のガラス面装置により臺面絶對平衡
- 一、紙数の大量印刷に適する上梓の自然上下運動装置
- 一、發條による上梓自動閉裝置
- 一、上梓廻轉による原紙張替の簡易

專賣特許

谷岡式謄寫版
同附屬品
製造販賣

谷岡商店機械部

京城府本町四丁目
電本長三三四〇・一八二〇
振替口座京城二三五一〇

朝鮮皮革株式會社

京城 永登浦

○ 賛助者芳名 ○

本會の趣旨を賛せられ援助の意味を以つて御寄附を賜はり、會則第六條に依り賛助會員として御入會を頂きました。向は五月二十日現在に於いて九十八名に上り、御寄附の總額は千八百八十圓に達しました。
左に芳名を録し御厚志に謝意を表します。(順序不同)

株式會社	朝鮮銀行	朝鮮紡織株式會社
株式會社	朝鮮殖産銀行	朝鮮興業株式會社
株式會社	第一銀行京城支店	日本タイプライター株式會社
株式會社	安田銀行京城支店	京城出張所
株式會社	三和銀行京城支店	帝國製麻株式會社京城支店
株式會社	朝鮮商業銀行	朝鮮米穀倉庫株式會社
株式會社	漢城銀行	大日本製糖株式會社朝鮮工場
株式會社	東一銀行	同朝鮮工場長堀
株式會社	海東銀行	日本製糖株式會社兼二浦製糖所
株式會社	湖南銀行	朝鮮麥酒株式會社永登浦工場
株式會社	慶尙合同銀行	昭和麒麟株式會社永登浦工場
株式會社	大邱商工銀行	大同生命株式會社京城支店
株式會社	朝鮮貯蓄銀行	太陽生命保險株式會社京城支店
		支社長 狐塚初吉殿

所 感

京畿・漣川 盧 演 錫

昨秋朝鮮統計協會が創立せられるや、早くも機關雜誌「朝鮮統計時報」を世に送り出すに至つたことは、統計關係者の一人である私として誠に欣快に堪へない次第であります。

力強い歩みを永遠に續けるべく嗚々の聲を上げました我が時報は、地方にある我々にとつては誠に適切な通信連絡の機關といふべきでありまして、先賢諸賢の御高見を拜聴して蒙を啓き疑義を解き、又各自の所懐を發表し相提携して統計の向上に盡す機會を與へられましたことは、是れ全く發起人諸賢の御熱誠の賜でありまして、深甚の謝意を表する次第であります。願はくは統計知識開發の爲に、本誌が益々發展せんことを。

× × 平南・孟山 劉 濟 民

統計は各般施設計畫の指針となるものであつて、國力の伸張と相俟つて益々喫緊の要あるは今更喫々を要しない。古の如く國家は唯現在の事情を推測判斷することに依つて能事終れりと

朝鮮地方行政學會	酒井與三	吉殿	取締役社長	上原誠	治殿	京城府會議員	朝鮮商工會	所殿	京城商工會	所殿	京城商工會	所殿	仁川商工會	所殿	開城商工會	所殿	群山商工會	所殿	大田商工會	所殿	全州商工會	所殿	木浦商工會	所殿	大邱商工會	所殿	元山商工會	所殿	清津商工會	所殿	朝鮮金融組合聯合會	所殿	同 京畿道支部	同 忠清南道支部	同 全羅北道支部	同 全羅南道支部	同 全羅南道支部	同 黃海道支部	同 平安南道支部	同 內務局長	同 財務局長	同 內務局長	同 財務局長																						
殖産局長	穂積眞六	郎殿	農林局長	矢島杉	造殿	學務局長	渡邊豊日	殿	法務局長	増永正一	殿	前警務局長	池田清	殿	總督官房文書課長	塩田正洪	殿	水産試験場長	西田敬三	殿	總督官房臨時國勢調査課	統計官眞鍋半八	殿	京畿道知事	富永文一	殿	同 内務部長	大島良士	殿	同 産務部長	尹泰彬	殿	同 警務部長	佐伯顯	殿	全羅北道知事	高元勳	殿	同 内務部長	阿部明治太郎	殿	同 警務部長	井坂圭一	殿	同 内務部長	近藤常尙	殿	全羅南道知事	近藤常尙	殿	同 産務部長	姜弼成	殿	同 警務部長	古弼成	殿	慶尚南道知事	土師眞	殿	同 内務部長	松本伊織	殿	同 産務部長	朱本伊織	殿

し、進んで社會の改良發達に關心を持たなかつた時代は扱て措き、現代の如く昨日の事は今日に於いて満足せられず、刻々變遷極まりない時代に至つて、國家社會の複雑なる事情を綜合觀察し、適確の計量と理想の施設を爲さんとするには、統計を離れて何に據るべきであらうか。即ち今日の政綱が専ら統計に依つて方向を定め、統計に依つて運用されてゐる所以である。

故に統計の重要性に鑑み、從來其の資料蒐集に際しては正確なる事實の摘出に銳意力を盡されたのであるが、未だ普く統計思想が徹底してゐない爲か、動もすれば統計を輕視し事實の捕捉を怠つて達觀に依り、業績の如何を考慮して計数を改竄する等の事實が全然なかつたとも限らない。斯くしては到底統計の重大使命を果すことは出来ないものであつて、事實に則した統計でなければ、之を基礎とする計量は外形的に如何に完備してゐても、早晚破綻を來すは必定である。

統計事務は斯く重要なにも拘はず、從來之が指導誘掖の適當な機關なく、各自觀察と解釋を異にし調査の趣旨を没却する如き弊があつても、之を矯正し統一する何等の機會もなかつたことは、深く遺憾としてゐるのであるが、個々朝鮮統計協會が創立せられたことは快心に堪

同 警察部長	丹下 郁太郎殿	同 仁川府尹殿
黃海道知事	鄭 倚 源殿	忠清南道 大田府殿
同 内務部長	佐々木 忠右衛門殿	全羅北道 全州府殿
平安南道知事	安 武 直 夫殿	全羅南道 光州府殿
同 内務部長	河 野 節 夫殿	同 慶尚北道 大邱府殿
平安北道知事	大 竹 十 郎殿	慶尚南道 釜山府殿
同 内務部長	高 安 彦 殿	同 慶尚南道 馬山府殿
同 警察部長	古 川 兼 秀殿	平安南道 平壤府殿
江原道知事	孫 永 穆殿	同 咸鏡南道 元山府殿
同 内務部長	神 谷 小 一殿	同 咸鏡北道 清津府殿
同 警察部長	山 下 眞 一殿	慶尚北道 慶州郡廳員事務研究会殿
咸鏡北道知事	竹 内 健 郎殿	
同 内務部長	李 聖 根殿	
同 警察部長	下 飯 坂 元殿	
同 參與官	張 憲 根殿	
京 畿 道 京 城 府 尹殿		

寄贈圖書 (特に本協會宛に寄贈せられたるもの)

- 一、統計集誌總目錄
- 一、統計選集
- 一、樺太廳治要覽
- 一、鮮米情報(週刊)
- 一、北海道統計(月刊)

- 東京統計協會
- 柳澤統計研究所
- 樺太廳
- 朝鮮米穀研究會
- 北海道統計協會

へない。本會の設立は誠に時宜に適した措置であつて、統計事務の刷新向上に新紀元を開き、今や我が朝鮮統計界は期して大いに待つべきものがある。

慶北・高靈 安 瓊 煥

人口が幾何あるか、如何なる動きを示してゐるか。或は國民の生産、所得、分配の狀態はどうであるか、等々の複雑なる社會事實を、少くとも其の數量的方面が問はれる限り、之を何等かの方法形式に於いて捉へ、數字を以つて具體的明確に我々に示してくれるものは即ち統計であり、且つ統計にして始めて能く果し得るのである。

故に國家が其の政策實施の地盤としての社會を測定する意味に於いて、諸政策の實績を明にし將來の指針とする意味に於いて、統計を求め之を必要とするのは誠に當然であつて、社會の進歩向上が統計に負ふ所如何に大であるかは、専ら近世國家發達史の物語るところである。

されば統計の重要なことは多言を要せぬのであつて、殊に種々な意味に於いて非常時下にある我が國の現狀に於いては一日も之をゆるがせにすべきではなく、統計協會の使命は重且つ大なるものがある。

統 計 叢 話 (二)

村 辻 元

前號に於いては、統計の一般的な事柄を極く簡単に申述べたが、今回は主として總督府報告例に依つて報告する統計表の作製を中心として、その作製上注意しなければならぬ諸點に觸れて、諸賢の御参考に資したいと思ふ。

前にも言つた如く、總べての統計は其の數字が正確であることが絶対必要な要件であるから、それがためには其の統計は最も正確なる基礎に依らねばならぬ。統計は、統計の目的を以て實地に付單位調査を爲すとか、統計外の他の目的の爲めに調査した材料、即ち書類または臺帳を利用して統計を作製するかするのであるが、これ等の場合、何れ

もその基礎が判然としなければならぬ。この場合、人員の過少、事務の繁激等を理由として、中には机上達觀に依つて作られたものがあり、甚だしきは前年の計數を移記したとしか思へないものがあるが、こんなことは絶対にいやうに心掛けねばならぬ。

統計表作製の際には、其の出所を明かにすると共に統計材料を保存して置く必要がある。資料の保存は、統計の正確か否かを見るために重要であるばかりでなく、翌年になつて資料を蒐集する上からも参考となることが多く、假令事務擔任者が急に替はるやうなことがあつた場合でも前年の資料に依つて事務取扱の経緯を知ることの便宜があり、その間まごつくことなく、事務が圓滑に進んで行くのである。それ故統計表毎に、實查したものは其の實查資料を保存し、實查せずして、例へば臺帳の如きを利用して記入したものは其の臺帳名を當該表の餘白に記入するといふ具合に、出所を明かにせられたいのである。

總督府報告例に依る統計表の作製に當つては、よくその統計表の要求されてゐる意味を吟味し、様式を嚴密に研究し、殊に様式の注意事項は精讀して完全に理解するやうに

努力して行かねばならぬ。實にこの注意事項は當該統計表の作製に極めて重要な指針を與へるものである。

朝鮮總督府報告例第六條に依り、統計表の用紙は特別の定あるものの外美濃型を用ひ、用紙三頁以上に亙るときは、各頁の初行に項目の欄を設けることになつてゐる。しかしながら、中には美濃型でないものがあつたり、各頁の一行目に項目の欄が設けられてゐないものがあつて集計その他に不便が少くない。第七條に依つて、統計表中の數字はアラビヤ數字を用ひ、單位に「 \cdot 」を、千位、百萬位等の三位毎に「 \cdot 」附することになつてゐる。尤も特別の定ある場合はこの限りではない。

統計表は報告例の様式の示すが如く横表と爲すべきものを今尚ほ縦表に作つてゐるものがある。殊に邑面からの報告材料中には、同一表にして本表を横に、附表を縦と爲したものがあつたり、その上各邑面縦横が區々なるため集計その他に支障が少くないのである。實際横表は迅速正確にして實用に適するのであるが、これに反し縦表は、數字に見誤りが多く、記入に時間を要する等横表に比しては甚だしく遜色があるのである。

統計表中計數不明の欄には「？」を、計數なき欄には「—」

を、計數の單位に達しない欄には「○」を記入し、比較減の數字には「△」を冠する(第九條)、ところが計數のなき場合、從來作製のものには、全然記入なきもの點(、)、レ」または「○」を記し、甚しきは縦に「—」を記入したものがあつた。全然記入のないものは脱漏したものではないかといふ疑惑を生じ、「○」は單位に満たざるものと思惟せられ、縦線は數字と見誤る虞れがあり、屢々照覆の手續を要するのであるが、現在は統計表は横表であるから、計數なきところは横に線を記入せられたのである。それからこれ亦特別の定なき限りは、統計表中外書すべき數は朱書を以て、内書すべき數は×印墨書を以て併記することになつてゐる。

(第十條)

報告例規定の様式中、一部に該當事項なき場合と雖も成るべく様式を省略しないことにし、省略した場合には、必ずその理由を備考に明記して置く必要がある。

統計表には間々調査の時(觀察の目的たる時にて、調査を行ふ時ではない)を記入してないものがあるが、これは明記して置かねばならぬ。さうしないことには、何時の状態を調査したものか判らないのである。それで統計を印刷に附する場合でも、單に刊行月日のみを誌すに止めず、よく其

の調査の時を明かにし、年末と年度末、暦年と年度、暦年と年末、年度末と年度とを嚴格に區別して誌さなければならぬ。期間中の事實を報告しなければならぬのに、當該期間終了の月末現在を調査報告したものがあつて、注意してこんな誤りに陥らないやうに作製する必要がある。

統計表中の數字にして單位の定のあるものは單位迄掲げ、單位未滿のものはこれを四捨五入し、單位の定めのないものは、金額にあつては圓を、其他にあつては適當なる單位名稱を附し、單位以下三位迄掲げることになつてゐるが（報告例第八條）、特に定ある場合にはそれに依ることゝされてゐる。例へば様式に單位が示されてゐる場合には、それを誤らないやうにせねばならぬ。ところが從來、反を單位としてあるのに坪數を以て表示したものがあつて、米突を單位としてあるのに間、尺、寸の如きを以て誌し、圓位とあるを錢位迄記入し、歩位迄を指定してあるのに反位に止めたものがあつて、錢位迄としてあるのに圓位に止めたものがあるから、よく注意せねばならぬ。

統計表中には往々單位や稱呼を記入してないものがあるが、これは明記されたいものである。これがないために、利用に不便不都合があるばかりでなく、集計の場合、單位

の異なるものを合計するやうなことも起るのである。

言ふ迄もなく統計表の數字は、正確明瞭に記入しなければならぬ。ところが統計表に數字を斜書又は二行に誌したものがあつて、これは集計その他に不便が尠くないのであるから、様式の作製に當つては調査項目の多少、計數の大小等を考慮して正しく誌すべきである。それからアラビヤ數字を用ふべきところを横表に「日本」數字を用ひたものがあつたり、或は「日本」數字とアラビヤ數字とを混用したものがあつて、解り切つた問題の如くであるが、從來屢々このやうなことを見受けるから、注意を要すると思ふ。

三

解り切つた事ではあらうが、今少し製表のことに就いて述べて見たい。

統計表中内容と計が符合せねばならぬのに符合しないものが頗る多いのであるが、これは正確に符合せしめて置かねばならぬ。

調査項目中關係あるものであつて權衡を失したものがあつて、例へば同一表中數量と價額、段別と收穫高の如く相關關係あるものは、其各事項に付檢査して計數の正確を期せ

らりたい。

前にも一寸いつたやうに、計數の一致すべき各表の計數は、必ず符合せしめて置かねばならぬのに符合しないものがあつたり、また關係表であつて計數の符合はしないまでも、大體に於いて同數に近いものが現はれて來なければならぬ場合に、大變な隔たりがあつて相互の關係が顧慮されてゐないやうなものがある。これ等は同一係内は勿論、各課、係間と雖も事務擔任者相互が連絡をとり、尙ほ統計主任に於いても充分検査の上善處して戴きたい。

報告表中記入の數字に誤謬があつたときには全部を抹殺し上部に訂正の數字を記入し、訂正の箇所は成るべく責任者に於いて認印せられたいのである。

統計表を淨寫の際は、必ず校合、檢算の上誤謬のないやうにしたいものである。また多數騰寫の際、寫りが悪く數字鮮明ならざるものや他の欄または他の行に騰寫したものがあつたり、紙を正しく重ね、騰寫後にも必ず檢算校合せられたいのである。

統計表中には備考を記入しなければならぬ場合が時々あつたり、これ等の時には要領よく、成るべく簡單明瞭に記述して統計表の意味の徹底を圖るべきである。報告例第十一

條を見ると「前回に比し著しき異動ある事項の報告には其の理由を」、相當の期間に互り一定の傾向又は著しき異動を示し、その他特に重要なものと認むる事項の報告には其の概要を備考に掲記するやうに規定されてゐる。統計表中内書、外書、×印等特殊の記入又は符號を施したる場合には、報告例に明記してある場合と雖も備考に其の旨を記入せられたい。それから調査事項等様式の一部を省略したる場合とか、單位その他が地方の特殊事情等に依り報告例の様式と相違を來した場合にも備考に其の旨を記さなければならぬ。また天候其の他の影響のため統計の數字に大きな動きを示した時には其の理由を掲記し、關係ある地方及び事物との交渉、調査方法の改正其の他表中特異なる事項や参考となるべき事項、新たに事實の發生し又は消滅したるものに付ては其の理由を要點を逸せざるやうに記入せられたいものである。

統計表の不審照會に對する回答はその局部に止めず、計數の影響する範圍を克く究め、再照會を要せざるやう留意せられたい。

従來、統計表に送付書が添附されてゐるものもあるが、これは事務簡捷上省略してよろしいのである。朝鮮總督府

公文書規定第二條の二に依り省略し得ることになつてゐる。それから該當事項のない報告は、報告期に於いて其の旨を報告するのであるが、この場合には様式を添附することを要しないのである(報告例第十三條)。

統計表中邑面の報告に依ることなく、郡に於いて訂正したる場合には、其の都度訂正の理由を詳記して邑面に通知をして置く必要がある。

四

報告表の原議中決議月日、施行月日の不明なもの、又は淨寫、校合、發送者の認印のないものがあるが、充分の注意を拂つて遺漏のないやうにして戴きたい。

従來各種の統計の内、統計主任に合議しないものもあつたが、これは今後漏れなく合議し、統計主任をして統計の整理統一を爲すことを得しめるやうにしたい。これは大正七年官通牒第一四九號に依り報告例以外の統計と雖も外部と往復する場合には必ず統計主任に合議する規定になつてゐるのである。

統計表は其の作製に細心の注意を拂つて萬全を期すると共に、其の報告表の提出期限を嚴守するやうにせねばならぬ。

ぬのである。報告例第二條には統計表の報告に關して、「即報は即時、日報は即日、旬報・月報・季報・半年報及び年報は各所定の期間内に報告すべし」とある。ところが報告表中には提出期限を超過するものが尠くはない。甚だしきに至つては、該當事項のない表とか、報告事項の極めて簡單なもの、其他臺帳等に依り容易に作製せられる筈の統計表であつて期限を超過したものがあつて、特に氣を付けなければならぬ。尤も「報告にして延期を要するものあるときは、其の事由及報告豫定期日を、調査し難き事故あるときは其の事由を報告所定期限内に稟申する(報告例第十二條)ことになつてゐる。それであるから右のやうな事情にあるときは其の取扱を致さねばならぬのであるが、このことも實行されてゐないことが間々あるから注意しなければならぬ。統計表の報告期間を失せざるやうにするためには、統計主任が報告整理簿の如きものを備付け、各課係を督勵することとは効果の擧がる方法であらうと思ふのである。

それから若し統計表を報告した後、その表中の誤謬とか遺脱とかを發見した場合には、直ちに訂正申報し、その複雜なもの全部または一部の更訂表を提出しなければならぬ。また統計表の返戻または照會を受け、調査の結果訂正

を要するときは直ちに統計原表を訂正し、統計主任及び関係課係に合議しなければならぬ。

統計原表はこれを丁寧に整理して置く必要がある。ところが其の編綴が処理の年月に依つて行はれたがために、翌年分が入つてゐたりすることがあるが、何れも統計の属する年に依り内容と表紙記載の年を一致せしめられたい。従つて月報・季報・半年報の如きも、処理の年月によつて二箇年に分綴するといふやうなことをしないで、同一年に一括して編綴せられたい。表紙の記載には、「何年」と誌したものと、「何年度」と誌したものとがあるが、總べて「何年」として載きたい。

統計事務を円滑に、且つ正確に進捗せしめて行くがためには、統計例規の整理を充分にして置かねばならぬ。ところが通牒、訓令等にして例規となすべきものを一般統計表に合綴し、または例規でないものを合綴してゐる向があるが、充分注意して整理して載きたい。統計例規を一般例規と合綴したものがあるが、統計例規はそれのみを一括して綴ぢ、統計主任が之を保管し置き、關係各課係に於いても其の寫しを備へて置くやうにするが、よいと思はれる。

道府郡統計年報は大正二年三月、官通牒第七七號に依り

毎年一回製調することになつてゐるから、成るべく之を調製するやうにし、調製至難の場合には報告の都度主要統計の寫を統計主任の許に編綴して置き、年末に於いて年報に代用せしむべく綴纂せられたいのである。

資編 源纂 局纂
標準用語集 第三官廳用輯

(類石土・類物鑛・類屬金)

一册 金十二錢

(送料共)

でお願ひいたします
なるべく部數取纏め
の上至急御申込下さ
るやうお願ひいたし
ます
尙非賣品ですから書
店經由の御申込はお
断りいたします

町橋平昌區田神市京東

會協査調業工

番八九八一八京東・替振

版六四

頁五十七約

資源調査とゴム工場

原 正

朝鮮工場資源調査規則に依る調査票の上から見たゴム工場に就いて述べて見るが、朝鮮のゴム工場に於ける生産品は殆んどゴム靴に限られた感があるので、以下ゴム靴工場を主としてその大略を記載する事にする。而して各工場共設備の状況、経営の狀態等總て區々である事は勿論、地方に依り其の趣を異にしてゐるので一律に斯様であるとは言ひ難い。故に次に述べる事柄は唯調査上の参考に過ぎない事を斷つて置く。

第一號票

先づ勞働消費の欄であるが、ゴム靴は朝鮮人の生活必需品の一として缺ぐ可からざるものであり、普通ゴム靴の壽命が半年内外である點から一人當一箇年二足を消費する割

合になるので、需要額も亦相當の數量になる理である。而して盆とか正月等はその需要が多いであらう事は想像に難くない。故に各工場に於いても此の需要期の一、二箇月前が最も忙はしい時期と見做されるので、概して下半期は工場の繁忙期で上半期は閑散期と言ふ事が出来ると思ふ。次に參考として京城府廳の調査した結果を記載して見るが、之は數工場の平均を出したものである。

期	別	一日勞働時間	作業日數
一月—三月		九・七	四四
四月—六月		九・五	六七
七月—九月		九・七	六六
十月—十二月		一〇・〇	七七

次は燃料の欄であるが、ゴム工場の燃料としては蒸氣罐用としての石炭、其の他エナメル乾燥用として木炭、煉炭等を擧げる事が出来るであらう。

又電力消費に付いては他より供給を受ける工場が多く、其の使用量は使用電動機の馬力數、燈用電燈の數等に依つて自ら異なる。例へば三十馬力の電動機二臺を一日十時間

三百日間使用したとすると其の電力量は一三四、二八〇「キロワット時」となり、それに燈用の電力量を加へるので供給を受ける數量は遙かに多くなる理である。因に一馬力をワットに換算するのに七四六ワットと七三六ワットの二種類があるが普通我が國では七四六ワットを使用してゐる様である。

第二號票

ゴム靴の分類方法も種々あらうが、使用原料材料を主として分つ時は總ゴム靴と布靴に、色より分つ時は白靴・赤靴・黒靴・黄靴・青靴等に、用途から分つ時は運動靴・長靴・防寒靴・支那式靴等に分けられるが、記入方法としては總ゴム靴として大中小、其の他として防寒靴、運動靴、長靴、支那式靴、地下足袋等と言ふ様に記入するのが良いのではないかと思ふ。

第三號票

ゴム靴工場の原動機としては大抵電動機を使つてゐる様で、臺数或は馬力數の大小は種々であるが小さいものは

一馬力位から大きいものになると八十馬力位のものもあつて、用途はロール或はミシン等の運轉用が主である。

第四號票

原料材料の調査は仲々面倒であるが、一體原料と材料との區別はどうかと一度は誰しも疑問が起る事と思ふが大體次の様な見解で進めば良いのではないかと思ふ。原料とは人爲的に化學的變化を前提としたものを言ひ、材料とは人爲的に物理的變化を前提としたものを言ふ。そこでゴム靴製造にはどんな原料材料が必要であるかを調べるのであるが、原料として種々な藥品を使用するので、一應調査票を離れて一般ゴム工業について簡単に述べる事にする。

先づゴムの木から採つた乳狀液(ラテックス)を乾燥凝固させたものを生ゴムと言ひ之にも種々ある様であるが、主に鮮内で使用されてゐるものに「スモークドシート」と「クレープ」の二種がある。而して此生ゴムの儘では熱にあへば粘着し寒氣にあへば硬化脆弱となり實用に供せられないので、此の缺點を補ひゴムの彈性其の他の性状をも變化し實用的に價値つける爲、加熱、加壓の下に硫黄と化合さすのである。此の様な操作を和硫、加硫或は硫化と言つて、

一度硫化されたゴムは前記の缺點はなく弾性も遙かに増してゐるのである。

此の硫化に温和硫法と冷和硫法の二方法があるが、ゴム靴の場合は前者の方法に屬し使用する硫黄も脱酸粉末硫黄、沈降硫黄等が使はれてゐる。温和硫法では高温度と比較的長時間（二時間乃至六時間）を要するので、硫化促進劑を入れ硫化時間の短縮を計り工場の生産能率を高めるのである。

此の硫化促進劑にはどんなものを使用するかと言へば、酸化鉛、酸化亜鉛、「マグネシア」等があるが最近では東京新興化學工業所製「ノクセラール」、大阪日本染料株式會社製「ソクシノール」、獨逸I・G會社製「ウルカチツト」等の含窒素有機化合物が主に使用されてゐる様である。

次に冷和硫法であるが、之は常温の下に硫化するのでゴム風船玉、自轉車自動車等の「チユープ」、「オシメカパー」用ゴム、「サクク」類等の薄ゴム製品の製造に限られてゐる。朝鮮にはかゝる製品製造工場はまだないのではないかと思ふ。

此の硫化は生ゴムが製品になる迄の一工程であるが全工程を掲げて見ると次の様に言ふ事も出来るであらう。

(一) 捏 和
一、捏和 二、調合 三、成型 四、硫化 五、仕上

之は生ゴムをロールに掛けて充分捏返す事でゴムの粘性を増し且質を均一にするのである。此の時非常に熱を生ずるので必要に應じてロールの中心を水を通して冷却する様になつてゐる。又練る能率を高める爲普通ロールは異速度に廻轉する様になつてゐて最初は生ゴムのみを捏り相當捏つた時分に次に述べる調合劑を入れよく捏り合せて一の板とするのである。

(二) 調 合

調合は前にも述べた様にゴムを實用的に價値つける爲大體次の様な藥品を適當量宛調合する様である。

イ、軟化劑 ロ、着色劑 ハ、増強劑 ニ、増量劑
ホ、硫化促進劑 ヘ、老化防止劑

尙増強劑の能力を高め光澤等をつけるもので主にヒマシ油、大豆油、白絞油、菜種油、ワセリン、ステアリン酸、オレイン酸、アスファルト、ピツチ、パラフィン、サプステチユート、等が使はれてゐる様である。此のサプステチユートと言ふのは植物油と硫黄とを混合し

て作ったもので（普通サフスと言つてゐるがフアクチスが用語を使用し）軟化は勿論仕上げ非常に硬化されるので（その工場にも使はれてゐる）

ロ、着色劑 之は言ふ迄もなく色を附けるのであるが色素は水に不溶性のものを使ふのであつて使用薬品は大體次の様な物である。

1 白靴 亞鉛華、リトボン、硫化亞鉛、硫酸バリウム等

2 黒靴 黒鉛、カーボンブラック、油煙等

3 赤靴 ベンガラ、朱、ゴールデンアンチモン、レツド等

4 黄靴 カドミウム黄、オレンヂ等

5 青靴 群青

ハ、増強劑 之は製品の強度を増大させるもので普通亞鉛華、油煙、クレイ等が用ひられてゐる。

ニ、増量劑 之はゴムの質を害さない程度に量を増加して原料の單價を下げるもので普通次の様なものを使つてゐる。

硫酸バリウム、滑石、粉末石灰、フアクチス、再製ゴム等

こゝに再製ゴムと言ふのにアルカリ法に依つて作ら

れたものと油法に依つて作られたものの二種類があつて兩方共使用されてゐる様である。アルカリ法に依る再製ゴムは増量劑でなく普通の生ゴムと同様に使用され此の製造には高壓（百五十封度内外）其の他大規模の設備を要するので、鮮内には製造工場はない様である。増量劑として一般に使用されてゐる再製ゴムは大抵油法に依つたもので、故ゴム靴其の他屑ゴムをロールに掛けて粉にし車軸油等と混ぜ蒸氣で熱したものである。

ホ、硫化促進劑 硫化の所で既に述べたから省略する。

ヘ、老化防止劑 ゴムの老化する原因にも種々あるであらうが酸化が主なる原因であると言ふ説が最も多く、其の酸化を防ぐ事に依つて老化防止が出来るらしく其の藥品としては、獨逸 I・G 會社製バイガールがよく使はれてゐる様である。又最近では新興化學工業所、日本染料株式會社等の製品が使はれてゐる。

以上述べた様な藥品が四號票の原料としての大部分であるが此の外に張り付用の揮發油、ゴム糊を作る爲のベンゾール、揮發油等の溶劑も必要な原料であらう。

又布靴に必要な布帛類、包装用の木箱、紙、繩等の材

料を掲げなければならない。

第五號票

職工の調査であるが、どの工場でも確然とした分業をしてゐる理ではなく、ロールの運轉もやれば截斷もやる、グラインダー（研磨盤通稱バフ機）を使つて仕上もすれば包装もすると言つた様に兼務してゐる職工が多いであらう。又總ゴム靴を作る工場と總ゴム靴と布靴を作る工場では設備も異なれば職工の技能名も違ふ理であるので技能名を決めるのは困難であるが、總ゴム靴と布靴を生産する工場に付ては大體次の様な技能名の職工が考へられる。

ロール工、調合工、截斷工、成型工、加硫工、糊引工、ミシン工、検査工、研磨工、包装工、火夫等

勿論此の外に其の他の従業者に含まれる小使、人夫等や事務に従事する職員等も居るであらう。

第六號票

設備も各工場により異なるし、生産品に依つても違ふ理である。そこで總ゴム靴と布靴を製造する工場の設備としては大體次の様をものが考へられる。

練ロール、壓延ロール、底出ロール（之はその工場のマーク等をつけるためにロール面に切り込みのあるロー

ル）、ボイラー、硫化罐（之に一重式と二重式の二種類があつて、前者は總ゴム靴に後者は布靴に用ひられてゐる）、アルミ製靴型、底拔型、踵拔型、ミシン、截斷機、研磨盤、ポンプ等である。

× 以上述べ來つた事はゴム靴工場に就いての大體であつて、使用藥品にしても、職工技能名或は設備等にしても實際とは異つた點が多々ある事と思ふ故に調査上の参考にもなれば幸である。

質 義 に 應 ず

統計に關する質義は本會に於いて研究の上誌上を以つてお答へいたします。

但し特に急を要するものは返信料（三錢郵券）を送つて下されば直接お答へいたします。

申告書の整理に就いて

臨時國勢調査課

朝鮮昭和十年國勢調査申告書や其の他の調査書類は所謂中央集査の方法に依つて當課に於いて特殊の機械を使用し整理せられ、其の結果はやがて國勢調査世帯及人口概數の發表となり、速報・確定人口の編成となり、更に國勢調査報告書道編・全鮮編の編纂公表となるのであります。それならば之等の貴重な調査諸材料はどんな行程に依つて整理され、そして社會に發表の運びに至るのでせうか。これから其の編整の順序方法のあらましを述べて御参考に供したいと思ひます。

受付並検査

各道から提出された申告書や道府郡島邑面要計表や照査表、それに李王職・外國の軍艦・陸海軍部隊・艦船・刑務所等

の特別地域から提出された申告書や要計表は、大體一定の括にし木箱に詰めて當課に到着しましたので、先づ

「第一受付・検査」に於いて申告書は函數及括數の検査をなし、要計表は其の通數を、照査表は其の綴數を計算し、格納倉庫内に於いて配列臺帳に依つて府郡島別に仕分け、更に道別に配列棚に保管してあります。次に

「第二受付・検査」に於いて申告書に付ては各府邑面の調査區數を、照査表は通數を計へ、申告書には一調査區綴毎に青色の調査區表紙を貼附し、更に府邑面毎に凡そ五百枚を標準とした括を作つて、厚ボール紙の括表紙を付け臺帳の順序に依つて配列してあります。

「第三受付・検査」に於いてはいよいよ申告書内容の検査に入るのであります。他の府邑面又は他の調査區の申告書が混入して居ないか、又申告書通し番號や申告書枚數や準世帯の種類名稱が夫々所定の欄に記入してあるかどうか、記入に間違ひはないか、次に調査項目であるところの「氏名又は姓名」「男女の別」「出生の年月日」「配偶の關係」「常住地」「民籍又は國籍」の各欄記入事項の誤謬の有無や記入洩れの有無等の検査發見に努め、疑義に就いては直ちに其の調査區を管轄する府尹邑面長に對して照會の手續を

採ることになつて居ります。續いて申告書から直接算出して調査區別人口表を作成するのであります。

速報並確定人口の編成

世帯及人口概数の速報は各道より申告書に先立ち提出された道府郡島要計表と、特別地域要計表とに依つて算出公表せられるのであります。これは固より國勢調査の結果としての計數を一日も早く發表せられん事を期待する一般の翹望に副はんが爲めに、取りあへず前記要計表に依り算出し昨年十一月二十一日公表したものであります。

確定人口は曩に綿密に照合検査を了つた照査表や要計表と、上述申告書から直接作成した調査區別人口表とを對照検査を遂げた後、普通調査地域と特別調査地域との確定人口通計表を作り、更に全縣合計の算出を了へ、ここに各道府郡島邑面別の確定人口の公表を見るのであります。

速報人口の算出は確定人口のそれに比し前述の通り計數算出の基本となる調査書類の照合検査に幾分省略する所があるため、兩者の計數に僅少なから誤差を生ずるの蓋し已むを得ないのであります。

符 號

受付並検査と確定人口編成を完了した申告書は、次にこれを機械集計の第一階梯として符號化するのであります。即ち世帯人員の一人一人の調査事項に對し、亞刺比亞數字を以つて表す符號を記入いたします。例へば配偶關係欄に未とあれば1、有は2、死別は3、離別は4と云ふ風に、其の他の事項に對しても同様定められた符號を夫れ／＼記入することになつて居ります。

穿 孔

符號化された申告事項は機械集計の第二階梯として一人毎にカード（横一八・七纏、縦八・二纏の長方形の強靱な紙製計牌）に穿孔器を使用して孔を穿ち、更に之を穿孔検査器に掛けて穿孔に間違ないかを検査するのであります。尙穿孔検査のすんだカードは群穿孔器に掛けて、各調査區毎に道府郡島邑面及調査區の各番號の孔を同時に穿つのであります。これが終つたならば一度穿孔した計牌と調査區表紙に記入した計數とを對照検査し計牌箱に納め、一府郡島の完了毎に機械集計の方へ廻すことになります。穿孔検査の

完了した計牌は「パワース分類集計機」に掛け、結果表の原表となる集中表の示す順序に従つて分類集計をするのであります。計牌の孔別に集計機に通すと其の計数は機械が表示しますから、之を前述集中表に記載し検算の上結果表原表に移記いたします。此の移記された結果表原表の計数は更に再び検算して合計数の算出記入等必要な手續を了へて茲に始めて結果報告書の原稿が完成する順序となります。

編纂

前記結果表に記入された計数は更に一々検算と整理をなし、之等の計数を基礎とした比例を算出し、更に進んで組合された計数の内容に就いて矛盾があるかどうか、又前回調査の計数に比較して著しい増減があるかどうか、若しありとすればその原因は何であらうか、尙將來の趨勢は如何等と詳らかに計数の比較対照と事由の探究考察とを試みて結果の正確を期する爲に深甚の注意を拂ひ、尙簡單な統計圖表も作成挿入し、各編毎に結果の概要を記述して最初に各道編を順次に最終に、全鮮編を刊行公表する行程を辿るのであります。

倉庫

以上の如く各道や特別地域から提出された申告書や要計表は最も貴重な調査書類でありますので、當課所屬の煉瓦建倉庫に格納して、整理事務の必要に應じて毎日軌道に依つて數箇の運搬臺車に載せて搬出し、使用済の上は又搬入格納して其の取扱は嚴重に且つ最も大切に居るのであります。

×

ざつと以上の道程に依つて全鮮各世帯主から提出された申告事項は計數化され製表されて社會に發表せられ、そして政治に經濟に産業に、或は教育等各種の施政や事業計畫の基礎資料を提供するのでありますから、如何に各自の申告事項が貴重なるものであるかが肯かれるであります。

因みに當課には只今約百人の内鮮人男女の職員が以上の様な各種の分業的作業に従事し、そして最も規則正しく、能率的に勤務して居りますから、此の全鮮官民一致協力の下に實施された朝鮮の昭和十年國勢調査の成果は必らず期待に背かないものが得られることを信じて疑はないのであります。

話の塵

—2—

大義生

欄機の春は来た。京城昌慶苑の櫻は日本全國にも比類なしと云はれる程の見事さで、花時には毎日數萬の入苑者があり、夜櫻見物など女子供には命がけの仕事とされる位の大雑踏だ。之を見兼ねて昨年から人情總督のお察がよりで、總督府裏の景福宮庭園を花時だけ一般大衆に開放する事となつた。

晝休みの一時間は白亜の大殿堂はもとより、光化門通りの各官衙から、無精のお役人やハイヒールのタイピスト嬢がワンサと押しかけてゐる。が一般の入苑者はまだ少いのは折角の總督の御好意に對し惜しい氣がする。

元の農林局長渡邊忍氏は有名な愛煙家で、一本數圓もする高價な葉巻をくゆらすかと思れば或時は臭い朝鮮さざみをマドロスパイプにつめ込んだりする。何でも氏はピンからキリまで十數種の煙草を揃えておいて、時々變つたのを喫ふことにしている。こうする事がほんとうに煙草の味を生かすのだそう。

活飲も一人前十圓の豪華な宴會で飲んでも物足らなさを感ずる時もあるし、と云つて京家名物の立飲六屋で、二、三十錢の散財で満足する事も出来る。朝鮮式がお厭なら南大門通りの巨貫き、殖銀近くの食堂へ行けば、酒一本に丹飯、香のものに味噌汁で満足して、それで驚くなれ勘定めて十八錢、おでんやで一才一杯が一圓かより、カフェーなら五圓札一枚では心細い京城で、さりとて世はさまざまである。せいたくな味も一通りは判り質素な生活にも満足出来る人間こそ一番幸福と云ふものだ。

或農學校で卒業式がすむや否や一卒業生は寄宿舎から、新調の背廣に中折帽で悠然、校門を辭したとか、女學校を卒業した翌日、早速のお化粧、それも描き眉に口紅、婦人服にハイヒールで校長先生宅へ挨拶に來たとか、卒業式がすんで校門を出るなり、制帽をひきさいたとか噂とりの、であつた。學校さへ出ればもう占めたものと思ふのも無理ではないが、どうして仲々世間はそう簡単に迎へてくれぬ。

四月上旬、京畿道では道府郡在勤の雇員で、判任文官有資格者の任用考試をやつた。受験者二百十八名の内、普文試験合格五名、雇員四年以上勤務三十四名、中等學校卒業百五十三名、専門學校卒業二十六名と云ふいづれも立派な資格者である。此の内本年度内に實際屬官や公吏に任用されるのは約三十名見當とは、判任文官になるのも容易な事ではない。

資料

米

〔昭和十年〕

作付面積 昭和十年に於ける全鮮の米作付面積は水稲百六十五萬六千町歩、陸稻三萬八千町歩、計百六十九萬五千町歩で、前年に比し陸稻は八百町歩（二分二厘）を増加したが、水稲で一萬八千町歩（一分一厘）を減少したので、結局全體では一萬七千町歩（一分）の減となつてゐる。

收穫高 米の總收穫高は一千七百八十八萬五千石で前年より百十六萬七千石（七分）を、又最近五箇年に於ける平均收穫高一千七百二十六萬二千石に比し六十二萬三千石（三分三厘）を増加した。尙種類別に見ると米の大部分は秣米で生産高は一千七百十三萬二千石、粟合にして九五・七%を占め、粳米は百十八萬石（二・七%）、陸米は二十七萬三千石（一・六%）

料

である。

道別の收穫高は慶南の二百三十七萬一千石が最も多く總收穫量の二三・三%に當り、京畿の二百二十二萬四千石（二・四%）、慶北の二百六萬石（一・一・五%）に次ぎ、他に二百萬石以上の道はない。其の他百五十萬石以上は全南、黄海、全北、忠南の五道、百萬石以上は平北、平南、江原の三道で、咸南、忠北、咸北の三道は何れも百萬石に達せず中でも咸北の十七萬九千石が最も少い。尙朝鮮に於ける米の生産地である南鮮の四道（全南北、慶南北）は全鮮總收穫量の四三・六%を占めてゐる。

互當收重 一反歩當の收穫高は全鮮平均一石五升五合で前年に比し七升八合の増である。道別に見ると慶南の一石二斗八升八合が最も多く、其の他一石以上は黄海、平北、平南、咸南、江原、咸北、慶北、京畿の九道、一石未満は全北、忠北、忠南、全南の四道で中でも全南の九斗三合が最も少い。以上の如く米の生産地と云われる全南北に少いが之は旱害に依るもので、平年は他道に比し多く共少くない事を常態としてゐる。

統計メモ

内地産米の消長

農林省の發表に依ると内地に於ける昭和十年の米收穫高は五千七百四十五萬七千石、明治十六年は三千五十六萬二千石で、其の間五十三箇年に二千六百八十九萬五千石（八八%）を増加してゐる。而して此の増加は水稲と陸稻とで甚しく異り、明治十六年を一〇〇とすれば昭和十年に於いて水稲は一八四であるが、陸稻は實に三六一といふ驚異的指數を示してゐる。試みに明治十九年以降五十箇年を十年毎に區切つて

- 第一期 明治一九—明治二八年
- 第二期 明治二九—明治三八
- 第三期 明治三九—大正 四
- 第四期 大正 五—大正一四
- 第五期 大正一五—昭和 一〇

累年比較 最近十年間に於ける作付面積、收穫高、反當收量の消長をみると次の如し。

年	作付面積 (千石)	收穫高 (千石)	反當收量 (千石)
昭和元年	一、五八八	一五、三〇一	〇・九六四
同 二年	一、六〇二	一七、二九九	一・〇八〇
同 三年	一、五一八	一三、五二一	〇・八九〇
同 四年	一、六三二	一三、七〇二	〇・八四〇
同 五年	一、六六二	一九、一八一	〇・九八一
同 六年	一、六七五	一五、八七三	〇・九四八
同 七年	一、六四三	一六、三四六	〇・九九五

米作付面積及收穫高 (昭和十年)

前年總數	作付面積 (町)		收穫量 (石)		反當數量 (石)
	總數	水田	總數	米	
總數	一、六〇二	一、六〇二	一、七二七	一、七二七	一・〇五五
京畿道	二、〇〇〇	二、〇〇〇	二、〇〇〇	二、〇〇〇	一・〇五七
忠清北道	七、〇〇〇	七、〇〇〇	七、〇〇〇	七、〇〇〇	〇・九三三
忠清南道	一、〇〇〇	一、〇〇〇	一、〇〇〇	一、〇〇〇	〇・九三三
全羅北道	一、〇〇〇	一、〇〇〇	一、〇〇〇	一、〇〇〇	〇・九三三
全羅南道	一、〇〇〇	一、〇〇〇	一、〇〇〇	一、〇〇〇	〇・九三三
慶尙北道	一、〇〇〇	一、〇〇〇	一、〇〇〇	一、〇〇〇	〇・九三三
慶尙南道	一、〇〇〇	一、〇〇〇	一、〇〇〇	一、〇〇〇	〇・九三三
黃海道	一、〇〇〇	一、〇〇〇	一、〇〇〇	一、〇〇〇	〇・九三三
平安北道	一、〇〇〇	一、〇〇〇	一、〇〇〇	一、〇〇〇	〇・九三三
平安南道	一、〇〇〇	一、〇〇〇	一、〇〇〇	一、〇〇〇	〇・九三三
江原道	一、〇〇〇	一、〇〇〇	一、〇〇〇	一、〇〇〇	〇・九三三
咸鏡南道	一、〇〇〇	一、〇〇〇	一、〇〇〇	一、〇〇〇	〇・九三三
咸鏡北道	一、〇〇〇	一、〇〇〇	一、〇〇〇	一、〇〇〇	〇・九三三

とし各期の各年平均收量及前期の夫れに對する増加率を見る

期	平均收量 (千石)	増加率 (%)
第一期	一五、〇〇〇	一
第二期	一七、二九九	一四・七
第三期	一三、五二一	二一・四
第四期	一五、八七三	一七・七
第五期	一六、三四六	六・〇

となり増收の最も大なるは第三期最も少いのは第五期である。

次に收穫高、作付反別、反當收量の消長を指數に依つて見ると

期	收穫高	作付反別	反當收量
第一期	100	100	100
第二期	107	108	101
第三期	111	104	110
第四期	114	115	105
第五期	116	113	111

となる。即ち收穫高の増加は作付反別の増加に依存するよりも反當收量の増加に依る所多いことを示してゐるが、之は一に農政改良の結果と云ふべきである。

昭和八年一、六九七 一八、一九三 一〇七二
 同 九年一、七二二 一六、七七一 〇・九七七
 同 十年一、六九五 一七、八八五 一〇五五

即ち作付面積は大體に於て曬穀に増加し、收穫高は之に反し年に依り甚しく變動してゐる、然し之亦農業經營法の改良に伴ひ漸次増加の傾向を見せ昭和元年を基準とした指數は昭和十年に於て作付面積は一〇七、收穫高は一七、毀當收穫高は一〇九を示した。又米の種類別收穫高を見ると

年	稈米	糯米	陸米
昭和元年	一四、五三七	五七一	一九三
同 二年	一六、四三九	六〇九	二五〇
同 三年	二一、八二四	四七四	二二四
同 四年	二三、〇四四	四三九	二二九
同 五年	一八、三〇〇	五九四	二八六
同 六年	一五、一三三	四八八	二五三
同 七年	一五、五九八	四八三	二六五
同 八年	一七、四一七	五一七	二五八
同 九年	一六、八〇二	三六九	二三六
同 十年	一七、二三二	四八〇	二七三

となつて、稈米と陸米は漸増し、糯米は反對に減少の傾向を示してゐる。

麥

〔昭和十年〕

作付面積 昭和十年に於ける全鮮の麥作付面積は百三十六萬六千町歩で、前年に比し一萬三千町歩（九厘）を増加した。

收穫高 麥の收穫高は千二百三十一萬一千石で前年に比し百十九萬四千石（割七厘）を、又最近五箇年に於ける平均收穫高千四百五十六千に比し百八十五萬六千石（割七分七厘）を増加した。

種類別に見ると大麥の八百七十五萬二千石が最多で割合にして七一・一%を占め、小麥は百九十三萬三千石（一五・七%）、裸麥は百六十二萬七千石（一三・二%）である。

産地別に見ると全鮮で二五三十三萬四千石が最も多く全鮮總收穫高の一九・〇%に當り、關北の二百

大京城の誕生

懸案の京城府行政區域擴張は四月一日實施せられ、永登浦邑外八箇面から夫々全部又は一部を併合して東西十五軒（約四里）南北十二軒（約三里）の所謂大京城が出現した。其の總面積は百三十方軒（約八・四方里）で一躍從來の三倍半餘となり、人口も昭和十年國勢調査に依れば舊府城四十四萬四千人、それに今次新に編入された區域が二十四萬人、併せて六十八萬四千人の大世帯となつた。

之を内地六大都市に比較すれば

東京	方軒	五、八七六
大阪	一、八五〇	二、九六〇
名古屋	一、五〇〇	一、〇〇〇
京都	二、八九	一、〇〇一
神戸	二	九二二
横濱	二、八	七〇〇
京城	二、〇	六八四

十五萬四千石（一七・五％）、慶南の二百十萬九千石 道中でも平北の四萬五千石が最も少い。
 （一七・一％）之に次ぎ、他に二百萬石以上の道はない。反當收量 一反當收量は全鮮平均九斗一合で
 い。其の他百萬石以上は京畿の百四萬四千石のみ 前年に比し八升の増加を見た。道別では全南の一石
 で、五十萬石以上は黄海、忠南、全北、忠北の四道、 三斗六合が最も多く、慶南の一石一斗六升五合が之
 五十萬石未満は江原、平南、咸南、咸北、平北の五 に次ぎ、他に一石以上の道はない。其の他八斗以上

麥作付面積及收穫高 (昭和十年)

前年總數	作付面積 (町)		收穫		反當收量 (石)
	總數	大麥	小麥	收穫高 (石)	
一、三六六、五三〇	一、三三二、二九六	八、七五一、九六三	一、九三二、八一七	一、六二六、五二六	〇・九〇一
一、九四、九四七	一、〇四三、九七五	九〇〇、六五八	一、三三三、九一六	八、四〇一	〇・八七〇
八五、〇五八	五九〇、六七三	五〇七、四二八	八二、五六四	八八一	〇・六九四
八二、六六〇	八〇〇、五一八	六八七、九七一	七五、三五九	三七、一八八	〇・九六八
八七、〇五三	七九九、六一一	三三九、一四四	三三、一一五	三六、五五三	〇・八八四
一七九、〇〇一	二、三三四、三三一	一、五九九、一三〇	八八、八五一	八六六、三五〇	一・三〇六
二四九、五七三	二、一三四、二七一	一、九二六、三二〇	一七八、二七一	四九、六九〇	〇・八六三
一八〇、八八六	二、一〇八、五三一	一、七八〇、九一八	一〇三、六八三	三三三、九四〇	一・一六五
一四三、八三六	八六三、一五六	九八、九八七	七五七、九二七	八、二四二	〇・五九三
六七、七八四	四六六、五九七	一六三、五〇五	二八三、〇三六	二〇、〇五六	〇・六七八
五、九九九	四四、八六〇	四三、二七六	一、五八四	—	〇・七四七
七〇、三九八	四九八、四三四	三三三、〇三三	一六三、一三七	五、二三三	〇・七〇八
四三、七五三	二九九、五八四	二六九、一四五	三〇、四〇八	三一	〇・六八五
四六、八八三	三三四、七五五	三二四、四三六	一四六	一五三	〇・六九三
一、三三三、七八四	一一、一六、九四三	七、九九三、九六九	一、八三七、七八一	一、二八五、一九三	〇・八二二

となり、面積は利戸を遙かに凌いで本邦第六位、人口は横濱に僅かに及ばず依然第七位である。

釜山府 釜山府も京城府と同様に府域擴張を實施し、廣袤東西十一軒

(約二里半)南北一六軒(約四里)、其の總面積八十四方軒(約五・四方里)で従來の二倍半の地域となり、人口も昭和十年國勢調査に依れば十八萬二千人から一躍二十萬一千人となつて大都市の實録を備ふるに至つた。

羊毛増産の見込

北羊計畫による綿羊増産は本年更に二千五百五十頭の輸入をみる事となり、飼育頭数は一萬五千頭へと増大するが、これに伴ひ羊毛の生産は三萬四千キログラムに達すると見込まれてゐる、即ち

は忠南、全北、京畿、慶北の四道、入斗末浦は平北、江原、忠北、咸北、咸南、平南、黄海の七道で中でも黄海の五斗九升三合が最も少い。

累年比較 最近十箇年に於ける麥の作付面積、收穫高、反當收量の消長を見ると次の如し。

年	作付面積 千町	收穫高 千石	反當收量
昭和元年	一、二五七	九、五九一	〇・七六三
同 二年	一、二六〇	九、〇八〇	〇・七二一
同 三年	一、二六七	八、七四六	〇・六九〇
同 四年	一、二九三	九、三八八	〇・七二六
同 五年	一、三一八	九、九六四	〇・六八九
同 六年	一、三二七	一〇、二〇八	〇・七七五
同 七年	一、三三二	一〇、六一九	〇・八〇三
同 八年	一、三三六	一〇、三七一	〇・七七六
同 九年	一、三五四	一一、一七〇	〇・八二一
同 十年	一、三六六	一二、三一一	〇・九〇一

以上の如く何れも漸増を示してゐるが、之を更に指數に依つて見ると昭和元年を各一〇〇とすれば昭和十年に於て作付面積は一〇九、收穫高は二二八、反當收量は一一八となつて、收穫高は段當收量の増加に伴ひ作付面積の増加よりも稍勝つてゐる。

又種類別收穫高の指數を見ると昭和元年の各一〇〇

〇は昭和十年に於いて大豆は一二四、小麥は九一、裸麥は四二二となつてゐて、大豆と裸麥は増加し殊に裸麥の増加は顯著であるが、小麥は反對に漸減してゐる。

大豆・小豆・粟

〔昭和十年〕

大豆 昭和十年に於ける全鮮の大豆の作付反別は七十九萬二千町歩、收穫高は四百三十七萬五千石で、前年に比し作付面積は三千町歩（四分）を減じたが收穫高は五十六萬三千石（一割四分八厘）を増加した。

道別の收穫高は慶北五十四萬二千石が最も多く全鮮總收穫高の二二・四％に當り、黄海の四十九萬八千石（一一・四％）、京畿の四十七萬石（一〇・七％）、咸北の四十三萬九千石（一〇・〇％）は多い方で他に四十萬石以上の道はない。以上の他三十萬石臺は平北、江原、咸南、平南の四道、二十萬石臺は忠南、

五〇

種類	頭數	總量
コリテール	七、五二一	二六、二六二
雜	二、七〇二	六、七五五
蒙古種	一、〇四五	一、〇四五
計	一一、二二八	三四、〇七二

にして前年度の一萬二千頭に比し飛躍的の増加となつてゐる。尙ほ生産羊毛は引續き本府幹旋の下に陸軍に納入せられる筈である。

全鮮の職業紹介

總督府社會課の調査に依れば昭和十年中全鮮十三箇所（官設十私設六）の職業紹介所で取扱つた紹介狀況は

求人數	三〇、五四人
求職數	四、八三人
就職數	一八、七九人

で求職者が紹介者を通じて就職した割合は四五％を示してゐる。昭和二年朝鮮にはじめて職業紹介所が開設されて以來の總數は男子に

慶南の二道、他は何れも十萬石臺で中でも全南の十萬三千石が最も少い。

小豆 小豆の作付面積は二十三萬五千町歩、收穫高は九十三萬四千石で、前年に比し作付面積は千町歩(五厘)を、收穫高は六萬一千石(六分九厘)を

増加した。

大豆、小豆、粟作付面積及收穫高

(昭和十年)

前年總數	大豆		小豆		粟	
	作付面積(町)	收穫高(石)	作付面積(町)	收穫高(石)	作付面積(町)	收穫高(石)
總數	七九、八五六	四、七五五、三六八	二、三四、八〇七	九、四四、二九	七九、四三三	四、八〇、七四七
京畿道	八三、六六七	四、六九七、七九〇	一、一九九〇	五、四〇、〇〇〇	三三、九一九	一、七七一〇
忠清北道	三三、五六三	一、八〇、八三三	三、九一四	三、五、九三三	一、七〇八	一〇三、三七三
忠清南道	四三、七六八	二、八四、九三六	五、〇九九	二、六、一八四	二、七三三	一、五、七〇一
全羅北道	三三、九八九	一、八〇、三〇六	三、三〇六	二、〇、七六五	三、四三二	二、五、八四〇
全羅南道	三三、五七七	一、六三、七三三	三、二六八	二、〇、一三三	四、〇三三	二、四、五、三三
慶尙北道	六〇、一八七	五、四七、六四七	三、三三二	一、三、一三三	四、四四四	三、九、九六五
慶尙南道	三三、五三三	二、二〇、九八一	三、九一四	一、五、一〇六	四、四四四	一、七、四九四
黃海道	九八、八九五	四、九七、六三三	五、九、三三三	二、〇、七〇八	一、七、六、五三	一、一、七、三三三
平安南道	五三、五三三	三、〇〇、五三三	四、四、四四	三、三、三三三	二、六、七、七	九、六、八、八、四、五
平安北道	七五、五三三	三、九〇、九四八	三、三、三三三	二、八、四、四	一、一、八、〇、九	七、九、六、三三
江原道	七三、八〇〇	三、六、七、〇〇	三、三、三三三	二、六、七、〇	一、一、〇、〇	三、七、七、〇
咸鏡南道	六八、二二二	三、四、〇、九八	二、八、七、七	七、七、〇	一、一、三、三、九	三、〇、三、三、九
咸鏡北道	六七、九一八	三、四、一、七	二、九、七	一、〇、〇、八	六、六、六、六	三、三、六、一、二

おいて

求人 三、二七八人
求職者 二、六六八人
就職 八、七四四人
その就職率は三五%となつてゐるが、女子は

求人 一七、一八八人
求職者 一〇、三三三人
就職

その就職率六〇%と断然男子の就職率に比して好成绩を示してゐる。而して前記、昭和十年度の就職率四五%を創設以來の成績に比較すると、近年の好景氣を如實に反映して居る、以上は固定就職状況であるが、この外更に昭和十年度中の日傭労働者就職状況は

求人 三、〇九六人
求職者 三、〇五二人
就職者 二、六九四人
その就職率九四%といふ労働者沸底の好況時代を現出してゐる。

之に次いで江原、感南の七萬石臺も多い方である。

粟 粟の作付面積は七十九萬四千町歩、收穫高は四百八十六萬一千石で、前年に比し作付面積は三千町歩（四厘）を、收穫高は百八萬九千石（二割八分八厘）を増加した。

道別收穫高は黄海が最も多く百十七萬二千石で總收穫の二四・一%を占め、平南の九十六萬九千石（一九・九%）、平北の七十一萬石（一四・六%）に次ぎ、以上西鮮三道で全鮮總收穫量の五八・六%を占めてゐる。其の他感南、江原の四十萬石臺も多い方で其の收穫は小豆と同様西鮮の各道を主産地としてゐる。

累年比較 最近十箇年に於ける大豆、小豆、粟の收穫高の消長を見ると次の如し。

	大豆	小豆	粟
昭和元年	四、三五二 <small>千石</small>	九八六 <small>千石</small>	四、七七七 <small>千石</small>
同 二年	四、七四七	一、〇三八	四、九九四
同 三年	三、八一	七六四	五、二三三
同 四年	三、九九一	八一〇	五、二四四
同 五年	四、四九〇	八九九	五、五七三
同 六年	四、一三二	八六三	四、五九〇

昭和七年 四、四一〇 八七七 五、五三九
 同 八年 四、五五六 九一五 五、一四五
 同 九年 三、八一二 八七三 三、三七二
 同 十年 四、三七五 九三四 四、八六一
 即ち何れも増減を繰返すのみで現在に於ては十年前と略同様の生産を維持してゐるに過ぎない。

棉

〔昭和十年〕

作付面積 昭和十年に於ける全鮮の棉作付面積は二十一萬町歩で前年に比し一萬六千町歩（八分二厘）を増加した。

收穫高 收穫高は陸地棉一億六千九百九十萬斤、在來棉四千三百八十萬斤、合計二億一千三百七十萬斤で前年に比し陸地棉は四千九百二十萬斤（四割七厘）、在來棉は九百五十萬斤（二割七分八厘）を何れも増加し、合計に於て五千八百七十萬斤（三割七分九厘）の増収を見た。

昨年の農作物被害

昭和十年中の全鮮農作物の被害は面積にして七十萬一千町歩、金額にして四千六百三十四萬五千圓餘の巨額に上り、金額は前年の二倍、最近十箇年の最高記録を示した。内譯を見ると

旱害	千町	二四七	萬、圓	四、四三二
風水害	千町	二〇五	萬、圓	六、四四八
病蟲害	千町	一三八	萬、圓	二、五三七
電害	千町	九	萬、圓	四、六一
其他	千町	二二	萬、圓	二、三六〇
計	千町	七〇二	萬、圓	四六、四四五

となつて、被害總面積の三割五分金額の七割四分は旱害である。而して此の旱害は忠清、全羅地方の廣汎なる地域に互り激甚を極め且つ十年來始めて統計に現はれて來た数字であつて、前記の如く被害總額の激増を來したのも主としてこれに因るのである。

道別に見ると全南の六千四百六十萬斤が最も多く全鮮收穫高の三〇二%を占め、遂に降つて慶南の三千四百七十萬斤(一六・二%)、慶北の二千五百三十萬斤(一・八%)、平南の二千四百四十萬斤(一〇・〇%)も多い方で、他に二千萬斤以上の道はない。此の外忠清、黃海は一千五百萬斤より稍々多く、全北、忠北は一千萬斤より稍々多い。而して陸地棉は概して南鮮並に中部北寄の各道に産し、在來棉は殆ど西鮮の各道で占められてゐるが、北鮮の各道に至つては棉の生産が殆どない。

累年比較 最近十箇年に於ける棉收穫の消長を見ると

昭和元年	昭和二年	昭和三年	昭和四年	昭和五年	昭和六年	昭和七年	昭和八年
陸地棉 千斤	一〇、〇〇〇	一〇、七〇〇	一〇、七〇〇	一〇、七〇〇	一〇、七〇〇	一〇、七〇〇	一〇、七〇〇
在來棉 千斤	四、三〇〇	四、三〇〇	四、三〇〇	四、三〇〇	四、三〇〇	四、三〇〇	四、三〇〇
總數 千斤	一四、三〇〇	一五、〇〇〇	一五、〇〇〇	一五、〇〇〇	一五、〇〇〇	一五、〇〇〇	一五、〇〇〇

昭和九年 一、五〇〇、〇〇〇
昭和十年 一、三〇〇、〇〇〇
昭和十一年 一、一〇〇、〇〇〇

即ち昭和六年に於て大減收を見た外は昭和九年迄各年一億五—六千萬斤を往來し著しい變動を見なかつたが、昭和十年に至るや俄然二億萬斤を突破した。

棉作付面積及收穫高(昭和十年)

前年總數	作付面積(町)		收穫高(千斤)	
	陸地棉	在來棉	陸地棉	在來棉
總數	二〇九、五五六	二二、七四九	一、九、九四九	四、三、八〇〇
京畿道	七、二七	六、三六七	四、九三九	一、四四九
忠清北道	九、九六	一〇、四三三	一〇、四三三	一、四四九
忠清南道	一、三九八	一、七三〇	一、七三〇	一、四四九
全羅北道	一〇、六〇〇	一、八八三	一、八八三	一、四四九
全羅南道	三、七三三	六、九〇三	六、九〇三	一、四四九
慶尙北道	二、一七九	二、二〇〇	二、二〇〇	一、四四九
慶尙南道	二、七、五七	四、四七九	四、四七九	一、四四九
黃海道	二、四四三	一、五、九六	一、五、九六	一、四四九
平安南道	三、六、三一	二、二、四四	二、二、四四	一、四四九
平安北道	九、五、四四	四、五、四四	四、五、四四	一、四四九
江原道	四、〇、〇〇	二、一、六〇	二、一、六〇	一、四四九
咸鏡南道	一、七、七	一、四	一、四	一、四四九
咸鏡北道	一、五、一、五五	一、五、一、五五	一、五、一、五五	一、四四九
前年總數	一、九、九四九	一、四、四三三	一、九、九四九	一、四、四三三

全鮮の鑛區

昭和十一年一月一日現在に於ける全鮮鑛區設定数は五千五百九十六鑛區、坪數三十七億九千二百二十七萬坪で、實に全鮮總面積の五分に相當してゐる。これを昭和十年初に比較すれば鑛區數に於いて一千二百四十二、坪數において九億七千二百二十萬坪の増加で鑛業熱時代を遺憾なく表現してゐる。最近三箇年間の消長を見ると次の通りである。

昭和九年	昭和十年	昭和十一年	
鑛區 坪數(千坪)	三、〇、五九〇	四、三、五〇	五、五、九六
鑛區 坪數(千坪)	二、〇、九〇	二、二、〇、七〇	三、七、九三
鑛區 坪數(千坪)	一、〇、〇〇	一、〇、〇〇	一、〇、〇〇
京畿	三、三三	三、三三	三、三三
忠北	三、六三	三、六三	三、六三
忠南	六、〇七	六、〇七	六、〇七

之は南棉北羊政策の如實に反映したものと見るべきであらう。尙種類別收穫高の趨勢を見ると在來棉が辛うじて十年前の收穫高を維持してゐるに反し、陸地棉は著しい増加を見せてゐる。

工場

〔昭和九年〕

工場數 常時五人以上の職工を使用し又は五人以上の職工を使用する設備を有する工場（但し金屬の製鍊及材料製造を爲すものは三十人以上を使用し又は使用する設備を有するものとす）は昭和九年末に於て五千二百六十八工場で、前年に比し二百八十八工場（六分）を増加してゐる。

之を産業別に見ると食品工場二千二百六十八工場が最も多く總工場數の四四・二％を占め、化學工業の九百二十二工場（一七・六％）が之に次いでゐる。他は遙に降つて紡織工業は三百三十六工場、窯業は三百二十二工場、機械及器具工業、印刷及製本業、金屬

工業、製材及木製品工業は各二百臺、ガス及電気業は五十二工場、其の他の工業は一括して二百六十八工場である。

尙工場數を産業別に前年と比べて見ると最も増加率の著しいのは紡織工業の七十工場（二割六分六厘）化學工業は八十二工場（一割）機械器具工業は二十工場（七分四厘）、食品工業は八十五工場（三分九厘）を夫々増加し、他にも増加したものが多い。

工場生産額 同年中前記工場に於ける生産物は四億七千五百三十一萬七千圓、加工及修理料は一千二百二十萬五千圓、併せて四億八千六百五十二萬二千圓で、前年に比し一億百七十萬圓（二割六分四厘）の激増を示した。

生産物價額と加工修理料との總額を産業別に見ると食品工業は二億六千七百八十四萬二千圓で最も多く總額の五五・一％を占め、化學工業の六千八百二十三萬三千圓（一四・〇％）、紡織工業の四千九百八十二萬二千圓（一〇・二％）、金屬工業四千五百五十五萬七千圓（八・五％）は多い方で、他は遙に降つてガス及電気業、製材及木製品工業、印刷及製本業窯業は一千萬圓以上一千三百萬圓未滿で略同額、機械

吠生産の激増

昭和十年度穀物検査所に於ける吠検査成績を見るに左の如く總計四千二百七十一萬五千枚にして、前年度の三千八百一萬五千枚に比し四百七十萬枚の激増を示した。

全北	三三三	一六〇、一〇〇
全南	一九五	一三、五〇〇
慶北	四一	二七、七〇〇
慶南	二六	九五、九三三
黄海	四九	二七、一八七
平南	四九	五〇一、六五〇
平北	八七	五八四、六四二
江原	六三	四三、五五五
咸南	八三	五八、六六一
咸北	三五	一八、九二七
合計	五、九一六	五、七二、二七二

穀用吠 三三、九九九千枚
 鹽用吠 五、二五七千枚
 肥料吠 二、四六三千枚
 計 三、七二六千枚

器具工業及其の他の工業は六百九十萬圓で是亦略同額を示してゐる。以上の如く食料品工業が全體の過半を示してゐるが之は精米場で精米した約二億圓の米麥及其の他の雜穀類の價額を生産額として食料

工場及工場生産額 (昭和九年)

業種	工場数		生産額(千圓)	
	男	女	工場生産額	加工修理料
總計	四、八五八	三、三三三	五、八四八、八三三	一、六、一九〇
紡織工業	一、二六六	一、九七七	四、七五、三三七	一、一、三〇五
絹織工業	一、二六六	一、九七七	四、七五、三三七	一、一、三〇五
織物工業	一、二六六	一、九七七	四、七五、三三七	一、一、三〇五
機械器具工業	一、二六六	一、九七七	四、七五、三三七	一、一、三〇五
窯業	一、二六六	一、九七七	四、七五、三三七	一、一、三〇五
化學工業	一、二六六	一、九七七	四、七五、三三七	一、一、三〇五
製材及木製品工業	一、二六六	一、九七七	四、七五、三三七	一、一、三〇五
印刷及製本業	一、二六六	一、九七七	四、七五、三三七	一、一、三〇五
食料品工業	一、二六六	一、九七七	四、七五、三三七	一、一、三〇五
ガス及電氣業	一、二六六	一、九七七	四、七五、三三七	一、一、三〇五
其ノ他ノ工業	一、二六六	一、九七七	四、七五、三三七	一、一、三〇五
前年總數	四、八五八	三、三三三	五、八四八、八三三	一、六、一九〇

備考
 1 官營工場ノ生産額及加工修理料ヲ除ク。
 2 五人以上ノ職工ヲ使用スル設備ヲ有シ、又ハ常時五人以上ノ職工ヲ使用スル工場ニ付調査ス。
 但シ金屬工業ノ中金屬製鍊及材料ノ製造工場ハ上記ノ條件ヲ三十八トス。

農事改良低資の貸付増加

農林局調査、昭和十年(九年九月一十年八月)農事改良低利資金の貸付実績は二千九十四萬七千二百六圓にして、資金割當額千八百九十一萬四千四百十四圓の十一割七厘となり前年度の貸付總額に比し六百四萬三千九十二圓(四割五厘)の増となつた。之を金融業者別に見ると左の如し。

- 東拓 六、四三三、二八圓
- 殖銀 六、五五九、六九圓
- 金組 七、九四三、四九圓

次に資金別に見ると肥料資金は一千九百二十四萬五百四十四圓で資金總額の九割二分を占め前年に比し五割二分の増となつてをり、肥料外資金は百七十萬六千六百六十二圓で總額の八分に相當し、前年に比し二割四分を減じてゐる。

生産額と加工修理料の總額を産業別に前年と比較して見ると近時我國の工業界は化學工業及各種重工業の殷盛と輸出貿易の伸張とに依つて異常の活況を呈してゐるが、朝鮮に於ても之を反映して前述の如く工場の新設と既設工場の擴張相次ぎ爲に生産額も今迄にない飛躍的激増を見るに至つた。即ち機械器具工業は二百十五萬一千圓（四割四分六厘）金屬工業は千二百二十三萬四千圓（四割一分七厘）化學工業は千六百二十四萬二千圓（三割一分二厘）紡織工業は千九十一萬三千圓（二割四分四厘）を何れも激増し其の増が著しい方である此の外ガス及電氣業、製材及木製品工業、窯業、印刷及製本業は價額にして百萬圓強割合にして一割強を何れも増加した。

繭

〔昭和十年〕

養蠶戶數 昭和十年に於ける全鮮の養蠶戶數は春蠶を飼養するもの八十二萬二千戸、夏秋蠶を飼養するもの五十七萬六千戸で、前年に比し前者は一萬八千戸（二分三厘）を減したが、後者は一萬八千戸（三分三厘）を増加した。

繭產高 繭產高は春蠶一千四百六十九萬七千疋、夏秋蠶六百六十二萬二千疋、合計二千三百三十一萬九千疋で、前年に比し春蠶は百十八萬五千疋（七分四

十年度實棉共販

昭和十年度産棉花の共同販賣は咸鏡南北道を除く十一箇道に於て行はれたが、本年度は收穫高の激増に伴ひ昨年度に比すれば黄海道を除くの外は各道孰れも會つて無き大増加を示した。

即ち昭和十年九月以降十一年三月末日に至る期間前記十一箇道の共同販賣高を見るに實棉一億七十九萬六千九百四十一斤、價額一千七百八萬三千三百二十一圓（百斤當十六圓九十五錢）繰綿一萬三千九百五十六斤、價額七千四百六十六圓（百斤當五十三圓五十錢）にして之を前年に比すれば數量に於て實棉四千六百二萬四千五百二十八斤繰綿九千五百二十二斤を増加し、價額にありては數量の増加と上級棉の出廻歩合多かりし爲實棉七百七十四萬五千四百四十六圓、繰綿四

養蠶及繭產高 (昭和十年)

總數	養蠶戶數		繭種播立枚數 (千枚)	繭產高	
	春蠶	夏秋蠶		春	夏秋
總數	二,一三三,七七五	五七六,四七〇	一,四〇〇,〇〇〇	六三六	四七
京畿道	八〇,〇〇〇	四〇,七三三	六六	三	二
忠清北道	五,三三二	三,六四四	六七	三	二
忠清南道	六,四三三	四,〇〇〇	七〇	三	二
全羅北道	三,七〇〇	一,八七〇	三九	一	一
全羅南道	三,七〇〇	一,八七〇	三九	一	一
總數	二,一三三,七七五	五七六,四七〇	一,四〇〇,〇〇〇	六三六	四七

前年總數	八九八、二四四	五五八、三三三	一、〇〇〇	六八〇	四〇〇	三三、六九〇、八八八	五、八八二、〇〇〇	七、〇六、七六四
全羅南道	六〇、六三四	三二、四三三	九七	四八	五〇	一、〇一六、四〇五	一、二六八、〇五	九八八、一九
慶尙北道	一四七、〇四三	一一二、四八〇	二〇〇	一三四	七六	四〇、四三三	二、九七六、四六	一、一六八、〇七
慶尙南道	六五、八六七	四四、七六九	六六	三四	二二	一、九四四、四三〇	九一四、七八〇	四七九、六三〇
黃海道	五三、三八五	三三、三三三	六六	三四	一九	一、三三三、八三三	九六九、〇〇六	三三〇、七六六
平安南道	五〇、〇五六	二八、一五七	八〇	四〇	二七	一、七三三、〇八六	一、二七二、四四四	四六、三四三
平安北道	四八、八一五	三四、七七三	七五	四四	三	一、四一五、五三三	九三三、〇四三	四八〇、五二〇
江原道	九三、九〇〇	五〇、二五〇	二九	七七	四	二、四一六、八九	一、八六〇、三三七	五五五、三三六
咸鏡南道	五六、九〇〇	四三、六四六	七〇	四三	三	一、四八八、一八四	九四四、七八三	四四四、三九九
咸鏡北道	一五、四五六	一五、四三六	七	三	三	一、三三、三四三	六四、七三七	六八、〇〇六

厘)、夏秋蠶は四十八萬五千疋(六分八厘)を何れも減じ、合計に於て百六十七萬一千疋(七分三厘)の減収を見た。

道別に見ると慶北の四百八萬四千疋が最も多く全鮮總數の一九・二%に當り、江原の二百四十一萬七千疋(二・三%)、全南の二百十萬六千疋(九・九%)が之に次いでゐる。其の他は咸北の十三萬三千疋を除き何れも百萬疋臺である。

春蠶と夏秋蠶との割合を見ると春蠶は六八・九%、夏秋蠶は三一・一%となるが、後者の割合は漸次高くなつて行く傾向がある。

林産額

〔昭和九年〕

昭和九年に於ける全鮮の林産總額は一億六千三百萬圓で前年の九千四百萬圓に比すれば約一千二百萬圓の増加となるが、本年の統計には前年になかつた調査種目で飼料の約三百八十萬圓を含んでゐる。

林産額の種類別内訳は左の如し。

材	量	價	額
材	立方米	價	價
材	二、三六、八三三	一七、八五、七三	四二、〇〇六
材	一七、七、七三	一七、八五、七三	三三〇、〇六

千八百九十九圓、總計七百七十五萬三百四十五圓の増加を示すに至つた。

朝鮮簡保一億五千萬圓突破

三月末日現在の朝鮮簡易生命保險は總契約件數八十一萬三千餘件保險金額一億五千八十八萬圓に達し一億五千萬圓を突破した。

内鮮人別に見ると内地人は二十三萬八千件、五千二百五十九萬圓、朝鮮人は五十七萬五千件、九千八百二十九萬圓で、内地人の人口千に付四百二十四件に對し、朝鮮人は人口千に付僅か二十八件に過ぎない。即ち内地人と朝鮮人間の普及状況には甚しい懸隔があるが、このことは一面に於いて今後朝鮮人方面に普及の餘地を多分に殘してゐることを物語つてゐる。

味 淋 一、〇三二、三二一
 高 梁 酒 一、〇三二、三二一
 甘味葡萄酒 五五五
 果實酒 二〇七
 ウキスキ 二〇

即ち果實酒が前年に比し激減した外何れも増加し、特に創業日淺き鮮藤とールの進出と、味淋の増加は顯著である。
 尚以上の内主なるものに就いて道別造石高を見る
 と別表の如し。

主ナル酒ノ道別造石高 (昭和九酒造年度) (石)

	朝鮮濁酒	燒酎	朝鮮藥酒	清酒	麥酒
總 數	一、六〇三、〇三二	四、六八〇、〇三三	二、八〇〇、〇〇〇	九、七七一、〇〇〇	三、九七九、〇〇〇
京 畿 道	三、六〇、〇〇〇	四、〇〇、〇〇〇	五、六五〇、〇〇〇	一、五〇〇、〇〇〇	三、九七九、〇〇〇
忠清北道	一、〇〇〇、〇〇〇	一、五〇〇、〇〇〇	一、〇〇〇、〇〇〇	一、〇〇〇、〇〇〇	
忠清南道	一、〇〇〇、〇〇〇	一、〇〇〇、〇〇〇	一、〇〇〇、〇〇〇	一、〇〇〇、〇〇〇	
全羅北道	一、〇〇〇、〇〇〇	一、〇〇〇、〇〇〇	一、〇〇〇、〇〇〇	一、〇〇〇、〇〇〇	
全羅南道	一、〇〇〇、〇〇〇	一、〇〇〇、〇〇〇	一、〇〇〇、〇〇〇	一、〇〇〇、〇〇〇	
慶尙北道	一、〇〇〇、〇〇〇	一、〇〇〇、〇〇〇	一、〇〇〇、〇〇〇	一、〇〇〇、〇〇〇	
慶尙南道	一、〇〇〇、〇〇〇	一、〇〇〇、〇〇〇	一、〇〇〇、〇〇〇	一、〇〇〇、〇〇〇	
黃海道	一、〇〇〇、〇〇〇	一、〇〇〇、〇〇〇	一、〇〇〇、〇〇〇	一、〇〇〇、〇〇〇	
平安南道	一、〇〇〇、〇〇〇	一、〇〇〇、〇〇〇	一、〇〇〇、〇〇〇	一、〇〇〇、〇〇〇	
平安北道	一、〇〇〇、〇〇〇	一、〇〇〇、〇〇〇	一、〇〇〇、〇〇〇	一、〇〇〇、〇〇〇	
江原道	一、〇〇〇、〇〇〇	一、〇〇〇、〇〇〇	一、〇〇〇、〇〇〇	一、〇〇〇、〇〇〇	
咸鏡南道	一、〇〇〇、〇〇〇	一、〇〇〇、〇〇〇	一、〇〇〇、〇〇〇	一、〇〇〇、〇〇〇	
咸鏡北道	一、〇〇〇、〇〇〇	一、〇〇〇、〇〇〇	一、〇〇〇、〇〇〇	一、〇〇〇、〇〇〇	
前年總數	一、五五〇、〇〇〇	四、八〇〇、〇〇〇	二、九〇〇、〇〇〇	九、七七一、〇〇〇	三、九七九、〇〇〇

關東局國調確定人口

關東局昭和十年國勢調査の結果に依る確定人口の總數は左の通りである。

關 東 州 計 男 六五、七五五
 計 女 四七、八三三
 一、二三四、〇八一

滿鐵附屬地 計 男 三九、三九三
 計 女 一八、九五二
 五三、三四五

臺 東 廳 計 男 七、〇七五
 計 女 五、六七五
 一、二七、〇〇〇

花 蓮 港 廳 計 男 八、八八八
 計 女 五、六〇九
 一、二、四九七

澎 湖 廳 計 男 三、四七九
 計 女 三、四二二
 六、九〇一

朝鮮國勢調査 確定人口

(昭和十年十月一日)

朝鮮昭和十年國勢調査の結果に據る道府郡島邑別人口の確定數は五月五日發表されたが、道府郡島別摘要及對前同比較は左の如し。

	昭和十年	昭和五年
全 鮮	三、八九、〇三八	三、〇五、八、〇〇〇
京畿道	二、四、五、六六一	二、一、七、四三三
京城府	四、四、〇、六八	四、四、〇、六八
仁川府	八、二、九、九七	六、八、一、三三
開城府	五、五、五、五	四、九、三、三〇
高陽郡	二、六、六、六〇	一、九、六、六五
廣州郡	八、九、一、三三	八、三、八、二七
楊州郡	二、一、七、二四	一、〇、四、八、八五
漣川郡	七、六、八、三三	七、四、五、九八
抱川郡	六、八、八、一〇	六、三、一、七五
加平郡	五、六、七、七三	五、〇、〇、三九
楊平郡	七、八、八、一〇	七、五、五、九九
慶州郡	六、九、八、九〇	六、三、七、七
利川郡	六、八、一、三三	六、一、六、六一
龍仁郡	八、二、六、八八	七、九、三、〇〇
安城郡	八、九、六、七	七、八、九、五
振威郡	八、〇、一、〇一	七、四、五、五
水原郡	一、七、一、一七	一、五、九、五〇
始興郡	九、五、一、一	七、五、六、七
富川郡	一、〇、〇、六三	八、一、二、七
金浦郡	五、九、七、三	五、一、一、一
江華郡	八、〇、四、九	七、四、四、三
坡州郡	五、八、一、三九	五、三、三、〇一
長湍郡	六、六、三、九	六、七、七、〇一
開豐郡	九、一、四、〇	八、五、一、七
忠清北道	九、九、九、〇	八、三、三、三
清州郡	一、九、七、三、八	一、七、七、一
報恩郡	七、〇、一、〇	七、五、九、五
沃川郡	〇、七、一、三	〇、七、一、三
永同郡	七、二、三、三	六、八、〇、〇
鎮川郡	四、八、七、七	四、九、一、二
槐山郡	一、二、八、二九	一、三、六、七
陰城郡	八、二、四、四一	七、五、九、三〇
忠州郡	一、三、一、〇七	一、二、一、二
堤川郡	八、八、一、五	八、五、六、六
丹陽郡	四、九、〇、八	五、二、五、九
忠清南道	一、五、六、八、三五	一、三、三、八、八
大田府	五、九、〇、六一	五、三、三、八
大德郡	八、七、七、六	八、一、一、一
燕岐郡	六、九、三、七	六、三、三、六
公州郡	三、二、〇、〇	三、三、四、八
論山郡	一、四、九、九〇	一、三、三、六一
扶餘郡	三、三、三、三	三、一、一、九
舒川郡	一、〇、一、四	一、〇、七、三
保寧郡	八、六、八、〇	八、〇、七、三
青陽郡	七、二、六、六	七、五、五、五
洪城郡	九、九、五、四	八、七、三、一
禮山郡	一、〇、二、九	一、〇、一、四〇
瑞山郡	一、三、一、七〇	一、三、八、八一
唐津郡	五、三、一、〇	五、〇、九、〇
牙山郡	二、〇、九、〇	二、一、八、四
天安郡	三、三、一、〇〇	三、三、三、三
全羅北道	一、〇、九、三、三	一、〇、一、三、三
群山府	四、九、八、八	五、一、四、一

1935

1930

(大田郡)

全州府	四三、三八七	(全州郡)	一八五、四七〇	麗水郡	二〇〇、四四五	青松郡	五八、九八七
完州郡	一五一、〇三四		一八五、四七〇	順天郡	一五三、七二九	英陽郡	四八、四八五
鎮安郡	六九、七三〇		六九、七四一	高興郡	一五三、二四五	盈德郡	八六、三三四
錦山郡	七六、九〇五		七三、九六二	寶城郡	一〇〇、一三三	迎日郡	一七八、〇一五
茂朱郡	五二、七六九		五一、五七五	和順郡	一〇五、七四九	慶州郡	一九一、〇六一
長水郡	五三、二四一		五三、五二二	長興郡	九〇、八七五	永川郡	二七、〇二四
任實郡	八一、三九五		七九、七八九	康津郡	七九、七三九	慶山郡	九三、九二四
南原郡	一一五、二二二		一一五、〇六九	海南郡	一三三、八二二	清道郡	九四、一六五
淳昌郡	七三、八六二		七二、二五四	靈巖郡	九一、一七七	高靈郡	五四、三八九
井邑郡	一七四、九二八		一六五、四四四	務安郡	一九五、〇〇〇	星州郡	八四、一八六
高敞郡	一一三、三三九		一一五、〇二〇	羅州郡	一七五、八〇八	漆谷郡	七六、一五五
扶安郡	九八、七三四		八九、八四五	咸平郡	八七、二九六	金泉郡	一四九、〇三三
金堤郡	一七四、〇七八		一五〇、七七一	靈光郡	一〇一、八二二	善山郡	八一、四四一
沃溝郡	一〇八、一四八		一〇五、八八六	長城郡	九六、四六九	尙州郡	一八四、一九三
益山郡	一七〇、七九七		一五三、〇一八	莞島郡	八七、九五二	開慶郡	九六、四三三
全羅南道	二、五〇八、三四六		二、三三三、二五六	珍島郡	六三、九二八	醴泉郡	一一七、二二六
木浦府	六〇、七三四		三四、六八九	濟州島	二〇七、三三〇	榮州郡	八八、九三三
光州府	五四、六〇七	(光州郡)	一三四、八四五	慶尙北道	二、五六三、二五一	奉化郡	八七、五二〇
光山郡	一〇一、五六一		一三四、八四五	大邱府	一〇九、四四四	蔚陵島	一一、七〇〇
潭陽郡	八七、五二三		八八、〇三〇	達城郡	一七五、〇三三	慶尙南道	二、二四八、三三八
谷城郡	七六、一一〇		七五、一七七	軍威郡	六三、二七七	釜山府	一八二、五〇三
求禮郡	五三、六七八		五三、五六九	義城郡	一四三、三三〇	馬山府	五一、七七八
光陽郡	六一、七六九		五九、七四八	安東郡	一六六、九五六	晉州郡	一三六、八八九

宜寧郡	七,四〇〇	七,七一九	平山郡	一〇,七〇〇	一〇,一〇〇	江東郡	六,七二七	六,一七〇
咸安郡	八,三六七	八,三二一	新溪郡	四,〇三〇	四,四〇〇	中和郡	九,九八八	九,〇〇〇
昌寧郡	一〇,〇〇〇	九,七九四	蕤津郡	一〇,四八四	八,四三三	龍岡郡	一四,四三三	一四,四三三
密陽郡	一五,二二六	一五,四六三	長湍郡	九,八四九	八,九七〇	江西郡	一三,四九二	一〇,一〇七
梁山郡	四,三二〇	四,九一九	松禾郡	七,五三三	六,八九〇	平原郡	一三,四三三	一〇,一〇七
蔚山郡	一五,六八五	一四,九〇四	殷栗郡	四,八二九	四,八八三	安州郡	九,〇二四	八,一四四
東萊郡	一七,八四三	一〇,九六三	安岳郡	九,三〇八	八,〇二四	价川郡	五,六九〇	五,一三三
金海郡	三,四三七	三,〇六六	常川郡	一七,六七八	一四,四二四	德川郡	四,九三三	四,五二二
昌原郡	一五,〇八八	一三,三三三	鐵寧郡	一〇,三三七	九,九四一	寧遠郡	五,八八八	四,八七二
統營郡	七,三二六	七,一七三	貴州郡	一八,八二九	一〇,五八三	平安北道	一,〇一〇	一,〇一〇
固城郡	八,九二四	八,五三七	鳳山郡	一七,九三〇	一〇,八七一	新義州府	五,八八八	四,八〇七
泗川郡	八,〇八四	七,六四四	瑞興郡	六,三二六	六,八八三	義州郡	一七,〇三三	一〇,五三三
南海郡	九,一〇三	八,六三六	遂安郡	七,三四三	六,八三六	龜城郡	七,九六九	六,七四二
河東郡	八,八八七	九,〇三三	谷山郡	六,六四五	六,四七三	泰川郡	三,三三三	五,一五〇
山淸郡	七,七二六	七,八二六	平安南道	一,四九六	一,三二二	雲山郡	三,七〇九	四,七一一
咸陽郡	八,三二四	七,九四三	平壤府	一〇,三三三	一四,七〇七	熙川郡	七,三三三	六,一七〇
晉昌郡	九,五〇七	九,〇七八	鎮南浦府	五,〇五二	五,二九六	寧邊郡	一三,四三七	一三,九三九
陝川郡	二五,〇六五	二五,九三三	大同郡	一八,五九三	一六,〇二二	博川郡	七,七八五	七,四九二
黃海道	一,九七四,三二四	一,九七四,三二四	順川郡	一〇,三〇一	九,七九六	定州郡	一四,六五一	一三,四六七
海州郡	三〇,一七三	一八,二〇三	孟山郡	四,四四五	四,九九六	宜川郡	八,六四二	八,一〇一
延白郡	一六,四八一	一三,七三五	陽德郡	四,〇三九	四,三六六	鐵山郡	七,〇二六	六,九七五
余川郡	六,八七一	六,三二二	咸川郡	九,八〇五	九,四二一			

龍川郡	一三〇、九三三	二〇〇、八三三	北青郡	一四〇、八〇〇	一八〇、五七一
朔州郡	五三、九九八	四七、四六五	寧越郡	六九、五五八	六七、七六八
昌城郡	六三、〇二七	五五、八二〇	原州郡	七八、八二六	七三、六九一
碧潼郡	五五、二二五	五〇、八七三	橫城郡	七九、五八七	七二、八四三
梵山郡	八一、四三七	七五、二六六	洪川郡	九〇、一七五	七七、二四四
清原郡	四一、〇六五	七五、二五五	華川郡	四三、〇〇八	四〇、二二五
江界郡	一六、四四一	一五〇、七六九	金化郡	九七、八四四	九三、六三二
慈鏡郡	七三、五八〇	六一、六二五	鐵原郡	九二、四三七	八〇、四七九
厚昌郡	四四、一一八	五八、四四九	平康郡	六八、九三三	六三、三三〇
江原道	一、〇〇五、三七一	一、四七七、七七一	伊川郡	七五、六八六	七四、〇四六
春川郡	九三、五〇八	八三、九三三	威鏡南道	一、七三二、六七六	一、七七八、四九一
麟蹄郡	七六、四二五	七六、三三一	元山府	六〇、一七九	四三、七〇〇
楊口郡	五二、八一四	五三、三三四	咸興府	五九、七七一	四九、八五一
淮陽郡	八二、〇四四	八二、八六六	咸州郡	三〇、九三七	一七〇、五八五
通川郡	五五、八四七	五五、五六七	定平郡	八九、〇五九	八三、八二九
高城郡	六七、三二一	五五、〇三二	永興郡	一三三、九八八	一三三、八四〇
襄陽郡	七三、〇五三	六四、九七〇	高原郡	四九、五九九	四七、八五三
江陵郡	〇〇、三〇〇	九二、四二七	文川郡	四一、〇四四	四二、六九六
三陟郡	九三、二八八	八五、〇一四	德源郡	四〇、四五三	六二、八二二
蔚珍郡	七三、一三三	六九、四二七	安邊郡	八八、六三三	七五、四一三
旌善郡	五三、四〇〇	五七、〇二三	洪原郡	九三、八八八	八九、五五七
慶源郡	三二、二七七	六二、四七三	慶興郡	九二、三三三	六二、四七九
慶源郡	三五、二二二	三三、二四三	鐘城郡	五九、五九九	五九、三三四
會寧郡	五九、三三四	四八、三九〇	鐵城郡	四三、〇四二	四八、三四一
茂山郡	六六、六〇八	五〇、三二二	豐山郡	七九、〇七九	七六、〇八四
富寧郡	四六、四三三	四二、七八四	三水郡	六六、六三三	六六、四三一
城津郡	八七、八〇〇	八六、〇九八	甲山郡	一三七、〇二一	一〇四、八五八
吉州郡	八六、〇七九	八〇、三三九	咸鏡北道	八五二、八三四	七四三、二三四
明川郡	三三、八八〇	三三、六六一	清津府	五五、三三〇	五五、九三三
鏡城郡	一三、八七三	一三、六八一	鏡城郡	一三、八七三	一三、六八一

雑筆

第一線の體驗

池 周 甲

(黄海・延白)

私が本府から此の郡に轉勤を命ぜられたのは昨年十二月であつた。赴任に際し諸先輩から郡は第一線で其の忙がしいのはお話にならない、しかしそれだけ働き甲斐もあるが、と或は脅かされ或は激勵された。來て見ると、なるほど、昨年の暮から年度末迄夜勤に疲鈍を續けたが尙机上に山積する事務、土曜日の半休、日曜日祝祭日の一日を樂しむどころではなかつた。

ば男が妊娠及産で死んだり、幼児が老衰病で死んだり、等々。しかし是等は極端な一例で全部がさうでもないが、少くとも私がひそかに想像し覺悟してゐたものより、ひどいものがあつた。

以上の如きは獨り本郡だけの問題ではなく、恐らく全縣的の、そして現在の實情に於て或る程度迄どうにもならないとされてゐる状態ではなからうかと思ふ。先づ何よりも當務者の養成が大切だ——私が第一線に於て第一に感じたことはこれである。

統計の重要性に就いては私が繰返す迄なく既に言ひ盡されてゐる。そして斯の如き重大なる統計の掌に當る職員は、當然相當堪能の士であることが必要であるのみならず、統計事務そのものは甚だ技術的であつて、無經驗者を以つて直ぐに之れに充ててゐるのは考ふべきことである。

しかるに現在の府郡島の實情に於ては、只適宜主義を以つて適不適に拘らず人を選び、其の人をして多量の事務を兼ねて傍務的に統計事務を處理せしめ、邑面の單位調査を指導監督せしむるの餘儀ないやうである。こんなことが朝鮮統計界の進歩を阻む一つの大きな理由となるのではあるまいか。

之が改善策としては統計事務の重要性と特殊性に鑑み、本府に於いて先づ直接邑面統計事務の指導監督の立場にある郡島の統計職員を召集し、講習會を開催せらるゝこと、ならば多大の効果があると私は信じてゐる。

スピード時代

T 生

スピード時代と言ふのは一體どんな意味がよく知らないが現在で

は何事でも速いものを好むと言ふ世相である。之はある意味から考へると人間の競争心理の具體化したもので人智の發達乃至は人口の増加するにつれて益々超スピードを好む様になるのではないかと思ふ。

言ひ換へると人間の時間に對する尺度が漸次小さくなつて來る。現在では此の尺度は秒であるが少し昔の徳川時代を考へると江戸まで何日かかるとか、早馬で何日とか言つた様に一日が單位になつてゐる。まだ昔に遡つて御釋迦様時代を考へて見ると、御釋迦様の滅後三千年を末法の世と決めた等は全く時間に超越してゐるので、勿論之は法を解く者のみの考であつたかも知れないが、少く共千年とか三千年と言ふ様な大きなものが單位となつてゐる様に考へられる。故に此の時代にはスピード等と言ふ事は夢想だになかつたであらう。

そこで現今流行のスピードを調べて見ると昔と今と餘り變りがないであらう歩行は一秒間に一、三米乃至一、七米で、少し早いものになると鳩の一秒間十八米、鶯の一秒間三十米、燕の一秒間九十米等がある。此の様に自分より早いものを見た人間がもう少し早い何かを考へたに違ない。その結果今日の如き交通機關の發達を見たのであらう。

スピードの早い交通機關も種々あるが吾々の最も親みのあるものに自動車、自動車がある。此の自動車は一八二五年フランス人が發明したもので、最初はペダル等は全く兩脚で地面を蹴つて前進すると言ふ極めて幼稚なものであつたらしい。其の後之の改良乃至は利用とかは考へられなかつた様であるが、一八六九年に又フランス人ミシヨール、マギー等と言ふ人が考察改良の結果現在の様な自動車が生れたのである。其のスピードが一

秒間に三、五米乃至五、五米で一 生懸命踏むと一秒間に二五米位で あると、自動車も一八〇〇年代フ ランス人ニコラキニョーが發明 したもので、最初は蒸氣で動して ゐたらしく自動車を運轉してゐて も周圍を人が廻る事が出事と言 ふ。それでパリ市中を運轉して ゐた時騒擾して囚へられ投獄せら れたと言ふ事である。その時のス ピードが一秒間一、三米位で現今 の自動車は一秒間九米乃至五十米 位である。
諸種のスピードを列擧して見る と次の通である。
種 類 米/秒
血液(大動脈) 〇・三二—〇・三四
歩 行 一・三—一・七
市内電車 三・五
自 轉 車 三・五—五・五
自 動 車 九・〇—最大五〇
汽 車 一・〇
和 風 三・五—六・〇
烈 風 一五—二九

馬 (競馬) 一三
急行列車平均 一三
傳 書 鳩 一八
鶯 三〇
燕 (最大) 九〇
飛 行 船 二〇
飛 行 機 四〇—六〇
音 波 三四〇
砲彈(初速度) 三〇〇—八〇〇
小銃彈(同) 一六二〇—八七五
光 三〇〇,〇〇〇,〇〇〇

此の様に現在知られた範圍では光の速度が一番早いとされてゐる。一秒三十萬軒であるから一寸七萬五千里と言ふ事になる。そこで皆様もそんな早いものをどうして測るか大體測れないではないかと思はれるに違ないが、最初に測つたと言ふよりは知つた人はレーメルと言ふ人で、木星の衛星の蝕を觀測してゐる内偶々光の速度を知つたのであるが三十萬軒より少なかつたらしい。地上で測つた人

にブラッドレーとかフィソウ。フーコー。マイケルソン等があるが、フーコーがやつたのは固定鏡と廻轉鏡とを用ひ廻轉鏡の廻轉速度と光源と反射光線の像の位置から光の速度を測定したので其の結果は二九、九九萬軒となり大體三十萬軒となるのである。

そこで人間がより超スピードを求めてロケット等に改良に改良を加へ、若し光の速度より早い何かを發明したらどうなるかと言ふと同じ一尺にも長短が出来たり、同じ一秒にも早い遅いが出来たりして理が判らなくなつて了ふ。そしてその様なロケットに乗つて空に向つて飛び乍ら非常な精巧な望遠鏡で吾々の地球を見ると、動くものは凡て後へ動くかと思へば、人間は段々若くなり最早死んだ筈の先祖が生きてゐる様子が目へたりして、全く超スピードの變り方が見られるらしい。

俳句

古都のさくら

庄司 香月
(忠南・扶餘)

扶餘山に兵士の精をらし山櫻
櫻散りて千古を偲ぶ落花巖
阜陽寺懸鐘の櫻や岩清水
夜櫻や平津塔の春の月
春雨や瀟湘樓の櫻散りにけり
懸鐘櫻江に映りて水紅し
櫻花散りて浮ぶや岩清水
櫻咲く學校林の記念植樹哉

カラットの話

山見生

カラット (Carat) は (Karat) なる語源は希羅語から来たもので、アフリカ地方に産する豆の一種であるカラットの重さより導出したものである。この豆粒は何れも大體

同じ太さで昔時黄金や寶石類を計量するに使用された。而してこの一粒の重さを一カラットとなしたと云ふ傳説がある。

現今用ひられてゐるカラットなる單位には寶石類の重量單位と、金の純度を表す單位との二通りがある。寶石類の重量を表す單位としてのカラットは國に依り都市に依つて色々異つてゐた。即ち最少のものでは伊太利のボロナカラットの〇・一八八五瓦から、最高のものでドイツのハンブルグの〇・二〇五八瓦まで、その他アムステルダム、コンスタンチノーブル、ベルリン、ロンドン等の各地非常に異つてゐた。そこでこれ等を單一化せんと再三企てられ、遂にフランスの提唱せる〇・二〇〇瓦を以て一カラットとする事が認められ、これをメートルリツクカラットと名づけ、一九一〇年前後に於て各國に採用せられ、日本も一九一九年よりこれを採用した。そして

現今では全世界を通じて一般的となつてゐる。

寶石の價格はカラットの二乗に比例して定める。例へばブリリアント形のダイヤモンドが一カラット三百圓とすれば三カラットのものには、即ち九倍の二千七百圓になる。但しカラットのみが價格の函數となるのではなく、むしろ有色の寶石では色の良否、透明度等がカラット以上にその價格を左右する。

寶石類の重量單位たるカラットと金の品位を表すカラット (金、K等の文字で表す) との間には如何なる關係があるだらうか？ これに就ては多くの説がある。その内理屈に合ふものを綜合すると、昔、或るローマの皇帝が創めて發行した金貨が丁度二四カラットの重量を有してゐた。それ以後この金貨を標準にして、例へば十八カラットの重さの金塊はこの金貨の15/24の價值を有し、十二カラ

ットの重さの金塊は 12/24 の價值を有することとした。斯の如くしてカラットは金塊の價值を示す單位となつた。それが更に進んで金製品の品位 (純度) を表示する語となつた。即ち 925 の金製品は 925/1000 の純金を含有し、そのものは全部が純金である。又 18K の金製品は 18/24 の純金を含有する。即ちその金製品の 3/4 は純金にして 1/4 は夾雜物なる事を表すに至つたものである。

次に各カラットに相當する合金歩合を示せば

- カラット 一匁中の純金量
- 二四 一・〇〇〇匁
- 二二 〇・九一七匁弱
- 一八 〇・七五〇匁
- 一四 〇・五八三匁弱

となり、今日普通齒科醫の使ふ金冠は二二カラットである。又日本とイギリスとの金貨の純度を示せば次の通りである。

千分中の純金量 カラット
 日本金貨 九〇〇 一一・六
 英國金貨 九一六 一一・〇

尙現今では金の品位を表すにカラットを用ひず千分中に於ける純金分の表はし方が可成採用されつつある。例へば 900/1000、950/1000 等の純度を有することを表すものである。

詩を語る

今泉夜詩秀

吾々の一口に云ふ詩とは、もと新體詩といつたのであるが、その新體詩と云ふ言葉は、何時頃誰が用ひ初めたかと云ふと、明治十五年頃今は故人となつた外山、矢田部並に井上の三博士が西洋の詩の翻譯と、新作の長詩とを集め新體詩抄と名付けて出版されたのに始る。

それが今日では長詩と言ひ只、單に詩と云ふやうになつた。古代の詩歌も又其時々の長詩であつたことは争はれない。即ち神武天皇様が兎狩をお馳し遊ばす時に「うだの高城に鳴わな張る、我が待つや、鳴は障らずいすくはし、鯨さやるこなみがなほさば、たちそばのみの、なけくをこきしひえね、云々」と讀はせられたのも一種の長詩である。

源平時代になると今様と云ふのが流行した平家物語の祇王の歌の中に

君を始めて見る時は、千代も經ぬべし姫小松、御前の池なる龜岡に、鶴こそおれぬて、遊めれ。

と云ふのがあるがこれが今様である。なぜこれを今様と名付けたかと云ふと、つまり當世風の歌、と云ふ意味であらう。

次いで鎌倉時代になると、義經記と云ふ口調のよいものが出来、

琵琶に合せて歌ひ、更に宴曲と云つて酒宴の席で歌ふ曲が流行したが、これこそ今日の長詩と殆んど似かよつたもので、次に其の一節を擧げて見ると

霞棚引く雲井より、春立ちけりな天の戸の、明くる景色も長閑にて、鶯さそひ春の風、霞むとすれば淡雪の下草はなほ結ばれて、岩間の氷とけやらす、いかでか春の越えつらん云々

と云ふ調子である。斯様に長詩と云ふものは昔からあつたものである。

我が國古來から傳へられて來た歌の種類を記すと、左の五種に大別することが出来る。即ち

- 發句 十七字から成つてゐるもの
- 短歌 三十一字から成るもの
- 旋頭歌 三十八字から成立つもの
- 今様 四十八字から成るもの
- 長歌 句數に限りがないもの

以上は古くから分類されたものであるが更に明治以降に出來たものに

長詩 昔しから有り來りの規則に依らぬ長篇の歌の總稱

唱歌 樂器に合せて歌ふ曲の總稱(小學校、女學校等で用ひるもの)

軍歌 軍隊行進の際勇氣を鼓舞する爲用ひるもの

讚美歌 基督教會堂で歌ふもの

俗歌 前記以外のもの所謂俗に唄ふもの

右の分け方は句格に依つて分けられたものでなく、作者の目的と其の用ひられる場所とに依つて、此のやうに言ひならしたのである。

民謡は詩でないか——と云ふに、詩の發祥はむしろ民謡から起つたと云へる。音楽が民謡から發達したと同様に。ところが今の所謂民謡なるものは自然的發生の

「野の聲」でなく、意識的にある目的の爲に作り出されたものである。

民衆は勿論、民衆の詩であり民衆の詩である。太古の人間の「うた」は、感情のリズムと聲のリズムとが一致してゐた。そしてその感情は誰でも一樣に感じて感情を代辯したものであつた。ところが人間の文化は知識によつて原始的感情の單一から段々進化した。知識によつて磨かれた感情が、感々高度となるに至つて民衆と詩人は分離せざるを得なくなつた。

感情と云ふものはいかに複雑でも、その表はれは單純化されれば人を動かし得ない、詩の抒情の訴へるものは、その表れが單純な場合多くの人を動かす、故に民衆の詩が「民衆のための詩」となり「民衆の代辯する詩」となる爲には、先づ個人的な要素を捨て、かゝらねばならぬ。カフエーへ行く」と文藝雑誌「ホーン」に女はツマラな

いな」と云ふ歌を歌つてゐる。歌つてゐることはそれに同感してゐることである。此の同感に民衆的だからである。

小説でも大衆小説や通俗小説になると、何千萬と云ふ讀者をもち、可成り低い層へも流れ込むが世間には本などを一つも手にせぬ人間が又何百萬とあるだらう。然しその低い層へもこの流行歌だけは流れ込んでゐる。それは先づ文字の必要がないためと手つ取り早

く耳から受けたのが一つの同感を作る爲である。

この大衆的社會性をもつ今日の歌謡に比べて純文學の傳統を護る詩はまた餘りに狭少な天地に存在してゐる、それは社會性を缺くところか知識階級でさへ、ほんの同好者の一部に存在するほどのものとなつてしまつた。チャイナリストさへ見向きもしない存在となつてゐるのが現状である。しかしながら今のやうに新しい

自覺的な國民精神の興りつゝある時代に、詩のもつ使命は相當大きなものではあるまいか。

一一、四、一五

雜筆を

募る!!

新刊

内閣統計局編纂	第五回	生命	表	一・七〇
商工省編纂	昭和九年	會社	統計表	二・五〇
商工省編纂	昭和九年	工場	統計表	七・〇〇
商工省編纂	昭和九年	物價	統計表	一・二〇
商工省編纂	昭和九年	貨銀	統計表	九〇
商工省編纂	昭和九年	綿織物及絹織物	統計表	五〇
商工省編纂	昭和九年	商工省統計摘要		一〇

(ずま含を料送)

五十ノ一丁三西座銀區橋京市京東

會協計統京東

番四四九一京東替振

統計日誌

地方統計並文書事務視察

二月下旬より三月中旬に至る間文書課職員數班に分れ左の通り道府郡邑面に於ける統計並に文書事務の視察を爲した。視察要項は本府報告例の改善に關する事項、統計の單位調査方法に關する事項、その他統計並に文書事務に關する事項にして、主として地方下級廳の實情及希望を聴取し今後の事務改善に資する所少くなかつた。

村辻屬 他二名 京畿道、江原道管下
和田屬 他二名 咸鏡北道管下
日下部屬 他二名 咸鏡南道管下
岩下屬 他二名 忠清北道、忠清南道管下
松瀬屬 他二名 平安南道、黃海道管下

本府農村振興委員會

第二十七回本府農村振興委員會は三月二十七日開催、席上鹽田委員(文書課長)より農村振興事務の増加に伴ふ郡邑面の事務

膨脹を緩和し、以つて農村振興運動の圓滿なる遂行に資する爲、本府報告例の整理其他地方廳報告事務の軽減を圖つてゐるが、各局に於いても此の趣旨に依り尙一層善處せられたい旨の要望があつた。

昭和九年版統計書の刊行

豫て印刷中であつた「朝鮮の人口統計(昭和九年版)」は三月下旬完成した。

尙「朝鮮總督府統計年報(昭和九年版)」及「朝鮮總督府統計要覽(昭和九年版)」も四月下旬校了に附した。

昭和十年朝鮮國勢調査確定人口の公表

朝鮮昭和十年朝鮮國勢調査の結果による昭和十年十月一日現在に於ける道府郡邑島面別人口の確定數は五月五日總督府告示第三號(朝鮮總督府官報號外)を以て公表されるに至つた。

日本中部十八府縣統計關係者大會

三重縣統計協會に於ては創立七週年記念事業として、四日市大博覽會を機とし縣と共に、内務・文部・農林・商工各省・資源局・統計局後援の下に四月二十一、二の兩日四日市に於て日本中部十八府縣統計關係者大會を開催した。

一、目的 國産振興四日市大博覽會を機とし統計關係者の諸會合を開催、統計思想の普及と統計の進歩改善を圖る。

一、日程

第一日(四月二十一日)

日本中部十八府縣統計關係者大會(各府縣提出事項附議、宣言、決議、講演)

全國統計協會會長懇談會

日本中部十八府縣統計課長會議

第二日(四月二十二日)

神宮參拜

尙參加者は十八府縣の外特に朝鮮統計協會よりも統計協會會長懇談會に出席するやう申越があつたが、事務の都合上遺憾乍ら本會より代表者を送ることが出来なかつた。

會報

昭和十年度朝鮮統計協會收支決算書

(自昭和十年十月一日
至同年十二月三十一日)

收入ノ部		支出ノ部	
科	目	科	目
第一款 會費收入	第一項 會費收入	第一款 事務費	第一項 諸給費
	第二項 寄附金		第二項 諸當備費
	第三項 雜收入		第二項 諸當備費
	第四項 廣告料		第二項 諸當備費
	第五項 雜收入		第二項 諸當備費
	第六項 廣告料		第二項 諸當備費
	第七項 雜收入		第二項 諸當備費
	第八項 廣告料		第二項 諸當備費
	第九項 雜收入		第二項 諸當備費
	第十項 廣告料		第二項 諸當備費
總計		總計	
收入済額	未收入額	支拂済額	支拂未済額
合計	合計	合計	合計
豫算額		豫算額	
對シ増減	對シ増減	對シ増減	對シ増減
(△印ハ減)	(△印ハ減)	(△印ハ減)	(△印ハ減)
(△印ハ増)	(△印ハ増)	(△印ハ増)	(△印ハ増)

協會人事

幹事異動 (五月二十二日附)

幹事ヲ解ク 幹事 野口 庄作
 幹事ヲ解ク 幹事 加藤 一
 幹事ヲ囑託ス 松瀬 約四郎

道府郡島統計主任 (本會
地方委員) 異動

(一月一日以降五月一日迄)
 一、三日 振威郡 命 那屬 車相 (缺員)
 一、一 京城 命 同 李 夏載
 一、一 京城 命 同 甫 喜本利
 二、一 尙州郡 命 同 和 智謙
 二、一 慶北 命 同 朴 錫圭
 二、一 寧遠郡 命 同 崔 尹君
 二、一 慶北 命 同 崔 仁煥
 二、一 慶北 命 同 趙 任根
 二、二 長水郡 命 同 趙 任根
 二、二 慶北 命 同 趙 任根

財産目録

(昭和十年十二月三十一日現在)

勘定科目	金額
郵便貯金	八三二・一〇
振替貯金	七七六・二二
未収入會費	五四〇・〇〇
現金	五・四九
合計	二、一五三・八一

第二項 需用費	135.00	130.00	0	130.00	△ 5.00
第一目 備用品費	135.00	130.00	0	130.00	△ 5.00
第二目 消耗品費	0.00	0.00	0	0.00	△ 0.00
第三目 通信及運送費	0.00	0.00	0	0.00	△ 0.00
第四目 圖書及印刷費	10.00	10.00	0	10.00	△ 0.00
第五目 雜費	0.00	0.00	0	0.00	△ 0.00
第二項 會費	0.00	0.00	0	0.00	△ 0.00
第一目 會誌費	0.00	0.00	0	0.00	△ 0.00
第一目 編輯費	0.00	0.00	0	0.00	△ 0.00
第三項 豫備費	1100.00	1100.00	0	1100.00	△ 0.00
第一目 第一豫備費	1100.00	1100.00	0	1100.00	△ 0.00
第二目 第二豫備費	0.00	0.00	0	0.00	△ 0.00
總計	1245.00	1245.00	0	1245.00	△ 0.00
本年度收入支出差引	1245.00	1245.00	0	1245.00	△ 0.00
前年度繰越	0.00	0.00	0	0.00	△ 0.00
總計	1245.00	1245.00	0	1245.00	△ 0.00

○會費未納の方は至急納付して下さい。
 下さす。
 ○住所又は勤務先(雜誌送付先)變更の方は至急御通知下さす。

五、一	五、三、二五	五、一	四、三〇	四、二七	四、二二	四、一六	四、一三	四、一〇	四、九	四、一	二、三一	二、二四	二、二二
(洪城郡)	(永同郡)	(忠北)	(京畿)	(抱川郡)	(谷城郡)	(牙山郡)	(忠南)	(大田府)	(大德郡)	(仁川府)	(慶北)	(京畿道)	(善山郡)
命	命	命	命	命	命	命	命	命	命	命	命	命	命
同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同
津野	長田	長島	有田	松岡	金周	李元	木村	金學	熊本	小迫	清藤	中平	朴英
謙	弘	弘	正	明	燾	元	彰	炳	武	孝	重	重	植
深	野	島	田	岡	周	元	次	真	之	次	一	一	一

編輯後記

◆本誌には政務總監閣下から特に統計従事者の爲に懇切なるお言葉を頂くことが出来た。題して能動的的精神を喚起せよ——これはしかし獨り統計人のみならず、萬人の必讀頌味すべき大文字である。

◆本號から城大の大内先生にお願いして通俗平易な誌上講義を連載することとなつた。肩の重くないやさしい講義の中にあつた。啓發される所は至大である。

◆あちこち大分體裁をいぢつて見た。雑誌の型を一號毎に破壊して行くのは感心ものではあるまいが、しかしこれで大分型が整つて來たと編輯者は内心思つてゐる。

◆會員は本誌を「おいらの雑誌」と考へて、論說研究など惜しまず又しりごみすることなく發表して貰ひたい。尙統計に關する原稿に限らず隨筆、文藝、

其の他興味ある讀物も歡迎する。隨筆一欄はもつと増頁してもよいし、漢詩、和歌、俳句など相當寄稿があれば隨筆一欄を切離して別に文藝欄を特設してもよいと思つてゐる。

◆國勢調査課時代お馴染の野口全北理事官の退官は名残り惜

投稿歡迎!!!

論說・研究

地方通信・資料

質疑・雜筆

次號締切六月末日

しい。しかし氏は今後本府内産業經濟調査會囑託として活躍せられるので、公私共何彼とお世話になる機会が多いと思ふ。
◆文書課内各係の勤務替へが行はれて資源調査の加藤藤が統制係から庶務係へ、その後

空係から松瀬編が入られた。又文書課松江正信氏が國勢調査課屬に榮轉せられた。

◆道府郡島統計主任の異動も大分あつた。轉ぜられた方々の協会の爲盡された勞を謝すると共に、新主任各位の今後本會委員として御盡力賜はらんことをお願いする次第。

◆創刊號では祝電を寄せられた「二瓶士孝」氏のお名前を「二瓶士孝」氏とんだ誤植をした。不注意を詫びます。

◆今年の櫻は全国的に遅れて京城名物昌慶苑の夜櫻は五月の初旬。三日は日曜で見頃でお天気、この日の入苑者ざつと十萬、苑内迷見百五十件で……統計人は花を見るにも數字を並べたがる。

◆櫻の芬園氣の中で編輯にかかつて、目にしみる初夏の青葉を窓外に見やりながら編輯後記を書いてゐる。さてもはかない朝鮮の春ではある。

—(五・二〇)—

廣告案内

本誌廣告掲載御希望の向は本會事務所(朝鮮總督官房文書課内)又は本會地方委員(各道府郡島廳内)統計主任へ御照會ありたし。

昭和十一年五月廿五日印刷
昭和十一年五月三十日發行

定價(送料共)拾五錢

京城府西小門町官舎十三號

編輯兼 村 辻 元

發行人 藤 本 外 次

京城府南米倉町一五九番地

印刷所 行政學會印刷所

朝鮮總督官房文書課内

發行所 朝鮮統計協會

電話號碼二四八八番

改訂版

朝鮮總督府報告例別冊甲號

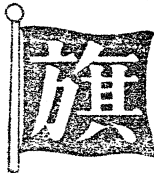
本書は本府文書課御校閲の下に昭和九年一月改正以降の官通帳及文書課長通牒に依り補訂したもので道の官公署は必ず一冊は必備付け下さい。尚發行部數に限りがありますから至急御申込願ひます

賣價一部 一、一〇〇
送料 代金引換 二、九四〇

京城府長谷川町七六

近澤商店出版部

電話本局九八・振替京城四四〇七



機幕 宣傳旗 會旗 優勝旗 校旗 萬國旗 國旗

旗店やカメラ

七丁目五番 五丁目三八番 金町一四番 府本局 京城府 振替